

# 歯学部ニュース

令和元年度第2号（通算136号）

特集 歯学部卒業おめでとう  
活躍の場を海外に広げて  
第52回全日本歯科学学生総合体育大会に向けて

# 目 次

<b>特集1 歯学部卒業おめでとう</b> .....	1
学部長から 前田 健康	
副病院長から 小林 正治	
卒業生から 馬場 麗未・野村 隆之・藤井梨紗子・鷲谷芙美子	
令和元年度 歯学部卒業生名簿	
<b>大学院修了にあたり</b> .....	8
兒玉 匠平・深町 直哉・小松 彩夏	
令和元年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻博士課程修了者論文名	
令和元年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命福祉学専攻博士前期・博士後期課程修了者論文名	
<b>臨床研修修了にあたり</b> .....	14
沢田 詠見・那須 優介	
<b>総務委員会だより</b> .....	16
前田 健康・小川 祐司・井上 誠	
<b>特集2 活躍の場を海外に広げて</b> .....	29
SSSV参加報告 村山 未帆・赤羽根開成・遠藤 和樹	
SCRП参加報告 相澤 知里・岸本 奈月	
<b>ジャパン・ビジネスモデル・コンペティション新潟ラウンドの報告</b> .....	34
林 幸穂・花沢 愛莉	
<b>特集3 第52回全日本歯科学生総合体育大会に向けて</b> .....	37
山村 健介・濱島 北斗・片木 源太・荒井 裕貴	
鈴木 気敏・小林 雅・馬場水彩妃・小林 優佳	
<b>第51回歯学体報告</b> .....	46
卓球部 関山 裕・弓道部 高橋 竜平	
<b>医歯学祭を終えて</b> .....	48
歯学科3年 小川 祐未	
<b>ポリクリを終えて</b> .....	49
強瀬 真衣・柳川万由子	
<b>早期臨床実習を終えて</b> .....	51
高津 彰史・藤田 彩夏・丸山 優依・白井 唯	
<b>素顔拝見</b> .....	55
小林 太一・金丸 博子	
<b>留学生紹介</b> .....	57
Sirima Kulvanich	
<b>学会受賞報告</b> .....	59
大澤 知朗・網谷季莉子・長崎 司・土門 久哲	
佐藤 拓実・原 さやか・金岡 沙季・小海 由佳	
鈴木 裕希・大墨 竜也・Traithawit Naksagoon	
<b>技工部だより</b> .....	70
山野井敬彦	
<b>新潟歯学会報告</b> .....	72
永田 昌毅	
<b>同窓会だより</b> .....	73
野内 昭宏・藤森 章浩・大島 賢	
<b>ミニコラム</b> .....	79
歯学部を支える方々 林 尚人・佐藤 純奈	
<b>教職員異動</b> .....	81
<b>編集後記</b> .....	86



## 卒業を祝して

歯学部長 前田 健康

歯学科第50期生の皆さん、口腔生命福祉学科第13期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。本日めでたくご卒業される皆さんに、歯学部教職員を代表して、心からお祝い申し上げます。また、保護者、ご家族の皆様方のご尽力にも敬意を表するとともに、お喜び申し上げます。

卒業生の皆さんは、新潟大学歯学部の教育課程を修了し、この春から、さまざまな道に進まれます。各人の進む道は異なるものの、国民の健康の維持・増進に寄与するという皆さんの目標は同一であると思います。

新潟大学歯学部は設置後50有余年となりました。設立後50年の間に、社会状況は大きく変化し、また変化し続けています。一つのキーワードとして、「超高齢社会の到来」があります。今までの歯科医療も健常者型から高齢者型へ転換することが求められています。また「グローバル化 globalization」もあります。グローバル化への対応は単に英語でコミュニケーションをとることだけでなく、異文化、自分と異なる価値観を持つ人達の理解、すなわち多様性 diversity の理解です。グローバル化が進む現代社会で活躍するためには、異文化適応性 adaptability to cross culture、言語能力 ability in language、法令遵守 compliance、そして専門能力 ability in specialty といわれています。皆さんのこれからの活躍には、専門能力を常に高め、維持することが不可欠なことはいうまでもありません。

政府は、狩猟社会 (Society 1.0)、農耕社会 (Society 2.0)、工業社会 (Society 3.0)、情報社会 (Society 4.0) に続く、我が国が目指すべ

き未来社会 Society 5.0 を提唱しています ([https://www8.cao.go.jp/cstp/society5\\_0/index.html](https://www8.cao.go.jp/cstp/society5_0/index.html))。Society 5.0 の目指すところは、IoT (Internet of Things) や人工知能 (artificial intelligence : AI) を活用し、これまでの情報社会 (Society 4.0) での課題を解決し、少子高齢化、地方の過疎化、貧富の格差などのさまざまな現代社会の課題の克服です。

皆さんが卒業する新潟大学歯学部の運営は国民の税金により行われています。タックスペイヤーである国民は皆さんに対し、常に幅広い教養、豊かな感性、きびしい倫理感を求め続けます。また専門的知識や技術を維持・向上させる責任も求めるため、皆さんにはさらに一層の平日頃の精進が不可欠となります。皆さんが社会から認められるためには、今日この日に、改めてこれからの長い人生に向けて新たな目標を設定しましょう。

本日、新たな夢を胸にスタートラインに立つ皆さんを、我々教職員一同はこれからも応援していきたいと思っています。卒業する皆さんには、折を見て母校を訪ね、また生涯の学習の場として、これからも新潟大学歯学部を積極的に活用していただけるように願っています。皆さんが今日巣立っていく新潟大学歯学部は素晴らしい教育資源を有し、国内外から高い評価を受けています。我々教職員は皆さんに対し、これからの社会で勝ち抜くために必要な考え方、知識、技能、態度を授けてきたと自負しています。新潟大学歯学部を卒業したという誇りを持ち、活躍して下さい。皆さんの今後の活躍を大いに期待してします。



## 卒業を祝して

医歯学総合病院 副院長 小林 正 治 (歯科担当)

歯学科第50期生ならびに口腔生命福祉学科第13期生の皆さん、卒業誠におめでとうございます。皆さんが新潟大学歯学部において勉学に励まれ、すべての課程を修了されて晴れて学士の学位を授与されました栄誉をここに称えますとともに、光り輝く未来に対して心から祝福を申し上げます。また、この日に至るまでの長い年月、皆さんの勉学を支えてこられたご家族の皆様方に対しましても、敬意と感謝の意を表します。

皆さんの大学生生活は、いかがでしたでしょうか？友人はたくさんできましたでしょうか？大学での授業は、知識を吸収することが中心であった高等学校までの学習とはまったく異質な学びの体験であったと思います。学問とは、答えの用意されていない課題に対して、自ら調べ考えたことを論理的に整理し、結論を与えていくプロセスです。そして、大学での学びを通して、皆さんは物事を考える視野の広がりや知識の豊かさ、正しい判断力や理解力を養い、人間としても大きく成長したはずです。皆さんが新潟大学で何を学んだのかを今一度反芻し、心に深く刻み込んで下さい。それは皆さんのこれからの人生において活力の源泉となるとともに、道標となるはずです。そして、皆さんが医療人としてさらに大きく育つためには、これまでに得た知識や技術を基礎として、その上にこれから何を積み重ねていくかが勝負に

なります。

近年、2040年問題が議論されています。これは、2040年に高齢者人口がピークを迎えることから、特に医療や介護の分野で厳しい環境が予測されるというものです。日本歯科医学会においても、歯科界が率先してその予測を覆す目標を掲げ、具体策を練り実行する事業を推進するために「2040年への歯科イノベーションロードマップ」の作成事業が行われております。今後、医療の分野においては、病診連携、医科歯科連携そして多職種連携をキーワードとして地域医療の連携強化が推進されるとともに、高度医療の実現や未来型医療の新たなイノベーションが創出されてくるものと思われます。これから20年後、皆さんは働き盛りの40歳台となり、日本の社会を支える中心世代となります。新たな時代を生き抜き、そして光り輝き続けるためにも、皆さんには広い視野を持って、医療ニーズの変化に的確に対応するとともに、知的好奇心を失うことなく、一步一步努力を重ねていただきたいと思います。

皆さんは、これから様々な分野で活躍されることと思いますが、新潟大学歯学部ならびに医歯学総合病院歯科診療部門は皆さんを全面的に支援します。そして、卒業される皆さんも、母校である新潟大学を未永く愛して下さいますよう心より願っています。

## 卒業にあたり

歯学科6年 馬場麗未

今回この原稿を依頼されたことをきっかけに、改めて歯学部で過ごした6年間を振り返りました。私は小学生のころから歯科医師になるのが夢でした。そのきっかけはありがちなものですが、歯科医の先生に助けてもらったからです。私は歯並びが悪く矯正治療する前は、人前で笑うときには必ず手で口元を押さえていました。しかし治療をしたことで、今では人の目を気にせず思いっきり笑うことができるようになりました。口元にコンプレックスや悩みを持つ人に力になりたい、そんな思いから歯学部を目指すようになりました。そのため新潟大学歯学部合格したときの喜びは今でも忘れません。

親元を離れて、知らない土地で生活していくことに不安を感じていた大学1年目。しかしその不安はすぐにはなくなりました。それは6年間をともに過ごしてきた50期の存在があったからです。落ち着きがなく先生方にも沢山ご心配をおかけする学年でしたが、団結する時には力を貸してくれるし、支えになってくれます。6年間一緒にいたからこそ、いいところも悪いところも沢山知っています。大人になると友達が減ると言いますが、大学時代にこれから一生付き合っていきたいと思える友人に出会えたのは本当に財産です。

また部活では中学から続けていたテニスをするため硬式テニス部に入部しました。いい意味で先輩後輩の距離感がなく、和気あいあいと過ごせたのは本当に幸せでした。大会ではいい結果を残すことはできませんでしたが、勝利に向けて頑張っ

た努力や悔しさ、チームをまとめる責任感など沢山学ぶことができました。ここで学んだことは今後、社会で生きていく上で絶対に役に立つと思います。

学業については日々学習でした。その中でもやはり一番思い入れがあるのは、1年間の臨床実習です。新潟大学ならではのこの実習。患者さんを前にして、自分の知識や技術のなさを痛感する毎日でした。しかし、日に日に患者さんとの信頼関係が強くなり、完成した補綴物を装着したときに「ありがとう！若返ったみたい！」と言われました。その時私は、「ああ…自分が歯科医師になりたいと思ったきっかけってこういうことだったな」と改めて感じさせられました。自分が目指す歯科医師像を再確認する良い機会を与えてくださったと、本当に感謝しています。

これから一番の目標である国家試験が待ち構えています。正直不安だらけです。でも悔いが残らないよう一生懸命にやるだけだと思います。それがいい結果につながることを期待してこの原稿を締めくくりたいと思います。6年間本当にお世話になりました。



## 卒業にあたり

歯学科6年 野村隆之



歯学部在学中の6年で、最後の1年は最も濃密で忙しく感じ、矢のように過ぎて行きました。特に5年後期からの臨床実習では、座学や基礎実習では習得できないような知識・技能が必要になり、最も学べることが多い実習だったと思います。患者様とのコミュニケーションにおいては、自分がまず説明する内容を理解しており、それを患者様の理解度を把握しながら話を組み立てる必要があります。また、患者様一人ひとりの状況を把握し、それぞれに適した治療を提案する難しさもありました。そのどちらにおいても、ライターの先生方がどのように対応なさっているかを見るのはとても勉強になり、研修より1年早く、時間をかけて取り組めたのはとても貴重な経験になったと思います。まだ未熟ではありますが、研修への準備として良いステップを踏めたと思っています。

臨床実習ではどうしてもわからないことがあり、壁にぶつかることが何度もありましたが、似たような状況を経験した同期生がいて、あっさり解決したりしました。患者様は十人十色であり、隣の席の同期生だけでは全く違う症例かもしれませんが、同期生40人の中には経験している人がきつといます。これから臨床実習に臨む在学生の皆様にも、聞くは一時の恥と思って、壁にぶつかったまま悩まずに、人の知識を取り入れて最も良い方法を貪欲に探して欲しいと思います。

国家試験の勉強においても、臨床実習はとても役立ちます。実際に行った診療の手順はもちろん、患者様、ライターの先生方、同期生と話した

内容はかなり記憶に残りやすく、問題集に出た時も、あの時話した内容だなあとしみじみ感じながら解くことができます。5年生までに覚えた知識も、同期生と話すとう理解が足りない部分が見つかるし、逆に相手が分かっていないこともあります。どれだけ教えても自分の知識が減ることはないので、積極的に情報交換をしてください。知識は誰にも奪われることのない財産です。臨床実習では人とのコミュニケーションを通してお互いの知識を確認し合い、足りない部分を補い合う、まさしく“研鑽”を行う場であったと思います。

臨床実習を無事に終えて卒業でき、とてもほっとしてはいますが、長い間ともに歩んできた同期生がそれぞれの道に分かれて進んでいくことを思うと少し寂しくも感じます。卒業後、研修後はさらに同期生が少なくなって、同じ知識レベルの相手と教えあうことは少なくなると思いますが、先生方にご指導いただいて貪欲に知識を深め、立派な歯科医師になれるよう努力します。同期のみんなとは、別々の環境でもそれぞれの研鑽を積み、時々会える機会に胸を張ってお互いの研鑽を見せ合えるような、良き仲間でありライバルであれたらいいと思います。

最後になりますが、お世話になった先生方、ならびに支えてくださった皆様、6年間本当にありがとうございました。



## 卒業にあたり

口腔生命福祉学科4年 藤井 梨紗子

口腔生命福祉学科に入学し、4年が過ぎ、卒業の時期となりました。振り返ってみると本当にあっという間の4年間であったように感じます。特に最後の4年次は、臨床実習や福祉実習と並行しての特論、就職活動、国試対策という想像以上に大変な1年間でした。

臨床実習では、診療補助やPMTC等をさせていただき、毎日多くを学ぶことができました。同時に、自分のできなさ、未熟さ、勉強不足を痛感する日々でもありました。しかし、先生方や歯科衛生士さんのご指導により実習が進んでいくにつれ、だんだんとスムーズにできることも増えていき、やりがいを感じることもできるようになりました。実習で学んだことをしっかりと今後に活かしていきたいと思います。

福祉実習では、地域包括支援センター関屋・白新で実習させていただきました。職員の方々、利用者さん、地域の方々が大変温かく対応してくださったことが強く印象に残っています。お茶の間やケア会議等、様々な場所にも同行させていただき、問題の解決のために様々な職種、立場の人が連携することの重要性や福祉の現場で働く方々の姿勢など丁寧なご指導の下、机上の学習だけでは学ぶことのできないことを学習することができました。

3年次には、タイのタマサート大学にて短期留学をさせていただきました。2週間という短い時間でしたが、タイと日本の歯科医療の違いや文化の違いを学び、また現地の学生と交流することも

でき、大変貴重な体験となりました。

また所属していた歯学部バドミントン部では、夏に行われるオールデンタルで、熊谷や岡山、福岡に行き、約一週間、部員と共に過ごしたことや他大学との交流ができたことは良い思い出となっています。先輩、同期、後輩に恵まれ、バドミントンをしたり、旅行に行ったり、飲み会をしたり、充実した日々を過ごすことができました。

実習が続く毎日は体力的にも精神的にも大変な日々ではありましたが、休憩時間や実習終わりに同期のみんなと他愛もない会話をしたり、一週間の実習が終わる木曜日にみんなで飲みに行ったりいう日常は幸せな充実した時間でした。卒業が近づくにつれてそんな同期のみんなとの時間も終わってしまうと考えるととても寂しく感じます。13期のみんなと4年間を共に過ごすことができたことは私の財産です。

最後になりますが、お世話になった先生方をはじめ、大学生活で出会ったすべての方々に感謝しています。本当に楽しい大学生活でした。これから歯科衛生士、社会福祉士として4年間で学んだことを活かし、社会に貢献できるよう努力していきたいと思います。ありがとうございました。



## 卒業生のことば

口腔生命福祉学科4年 鷲谷 芙美子

今回、「卒業生のことば」という題で原稿の依頼をいただき、「とうとう自分たちが卒業する時がきたんだなあ、学生がついに終わるんだなあ、まだ遊んでいたかったなあ」と第一に感じました。何を書こうかとこの4年間を振り返ってみると本当にあつという間で、つい何ヶ月か前まではJKだった入学当時の18歳の自分があとわずかです。社会人として働き始めているのかと思うと感慨深い気持ちになります（という数か月後のために国家試験の勉強の合間にこの文章を書いています）。

1年次は初めての一人暮らし、初めての土地での生活に不安を抱きながらも、新たに始まるキャンパスライフというものに胸を膨らませていました。五十嵐キャンパスでの生活はたった1年で終わってしまいましたが、たくさんのサークルからの勧誘や学食、大きな講堂、履修登録などThe・大学というものを味わうことができました。

2年次は歯科の実習やPBLがはじまったり、自分たちの講義室があることによって学科のみならずのかかわりも一気に増えたりと環境ががらりと変わった一年でした。高校までとは違いより自主的な学習が求められるPBLに面倒くささを感じるときも正直ありましたが、学生同士の相互実習など楽しいと思えることも多くありました。

3年次では新たに福祉のカリキュラムが始まり、社会系の科目が苦手な私にとっては、法律や時代の流れ、各国での違いなど福祉に関するレジュメは呪文のようにみえ、頭がパンクする思いでした。後期には病院での実習も少しずつ始まり、週2日の午前だけでしたが自分の知識の無さや空気感に圧倒され、4年次から始まる臨床実習

に不安を募らせていました。

不安を抱えたまま迎えた4年次。緊張の連続で、毎日重い足取りで病院へ向かい、お昼の70分休みは、束の間の休息で気づいたらまた午後の診療へ向かうといった日々でした。また、1か月の福祉実習では言葉でのコミュニケーションが難しい方との接し方や食事介助など貴重な経験をさせていただきました。これらの実習を通して学ぶことはとても多く、自信につながり歯科衛生士として働くことへの覚悟や期待を改めて感じる事が出来ました。

そして、この4年間を乗り切り、楽しかった学生生活だと思えるのはお世話になった先生方、支えてくれた家族、元気いっぱいバスケット部、そして4年間ともに過ごし、週末の突然の飲み会の誘いにも来てくれる口腔のみんなをはじめとした方々の存在があったからだと思います。とても感謝しています。

卒業後はみんなそれぞれの道に進みこれまでのように簡単に集まることはできないかと思いますが、これからもぜひ、飲み会等誘ってください。

今後は、これまでに学んだことを活かし福祉の視点からも考えられる歯科衛生士として日々精進していきたいと思えます。本当にお世話になりました。ありがとうございました。





# 大学院修了にあたり

## 大学院修了にあたり

包括歯科補綴学分野 児玉匠平

大学院の4年を振り返ると、何も覚えていないほどに楽しく（本当に覚えていない）めまぐるしい生活の日々でした。振り返ると、ギリギリ滑り込みの国家試験合格から研修Bコースでようやく歯科医療の入り口に立ち、大学院と開業医の間で悩みに悩んで大学院進学を決めたあの年の瀬、すべてが昨日のように感じます。

自分がいつから義歯を好きになったのかについては分からないほど、自然と興味がそこにありました。学生時代の義歯診療科の先生方、とりわけ熱血技工士の先生のとて人間臭く臨床への真摯な姿勢に打たれたのかもしれませんが。6年生の頃に小野高裕先生という何やらすごい先生が赴任するらしい、と知った時もワクワクしたのを覚えています。今思えば歯科医師である父も同じように義歯治療が好きでしたね。その頃の年齢は周りの影響を受けやすい時分ですから、知らず知らずのうちに進路は決まっていきました。義歯診療科での臨床研修によってさらに義歯に対するの興味が増し、外の世界の魅力と悩みながらも大学院進学を決め、そこからの3年間はひたすら臨床に打ち込むのみでした。刺激的ながらも心休まる医局の先生方に多くを学びながら、臨床と技工の日々を過ごし、気づいたら3年生の夏が終わろうとしていました。そこでようやく3年生の秋に遅めの学会発表デビューを果たし、運よく賞をいただきました。舌圧と舌運動というテーマで研究を始め、今現在は卒業論文を必死に書いている真最中です。当講座の研究は臨床に直結した内容のものがほとんどで、非常に興味を持ちやすい内容でし

た。当時の指導医の藤原先生に舌の運動について教えていただき、とても新鮮な気持ちでスタートしたのを覚えています。当然ながら日々の補綴臨床でも舌は密接に関係しており、とりわけ当科は顎補綴の症例も多いですから、臨床への考え方にとて生かされたと思います。超高齢社会の今日、訪問診療のニーズも高まり同時に義歯のニーズも増えています。当講座の大学院生は出張先で訪問診療に携わる機会が多いことも、非常に恵まれている環境だと思いました。

自分は新たなチャレンジをするときが一番ワクワクします。自分の努力ですべて決まるとも言われますが、その努力は十分な環境が土台としてあってこそものだと思います。その点、大学院生活は自分次第でいくらかでもチャレンジできる素晴らしい環境であったと、感謝の気持ちで一杯です。後輩の皆さんがもし進路で迷っているようならオススメしたいですね。

最後になりましたが小野高裕教授、堀一浩准教授、藤原茂弘先生をはじめ、包括歯科補綴学分野の先生方に心より感謝を申し上げます。



DRS (サンディエゴ)  
左から堀先生、小野先生、筆者

## 大学院修了にあたり

歯科矯正学分野 深 町 直 哉

私が新潟大学に来たのは研修医の時でした。慣れない環境の中、歯科総合診療部での研修生活がスタートし、あっという間に1年が過ぎ、矯正科の大学院に進学しました。社会人となったのも束の間、再び4年間も学生生活をするのかと思っていましたが、気づけば大学院も修了間近となりました。

大学院生といえば日々のカリキュラムと研究ですが、入局当初は矯正についての知識や技術もないため、治療のメカニクスの勉強、診断の準備、セファログラムのトレース、ワイヤー曲げの練習や模型作りなどやる事が多く、研究を行う余裕がありませんでした。何をやるにも時間がかかっていたため、夜中まで大学に残り技工物を作っていたのは、今となってはいい思い出です。それでも、日々の努力で少しずつではありますが、知識や技術を身につけ時間的余裕ができ、研究も並行して行うことができました。まだまだ未熟ですので、一人前の矯正科医として活躍できるように今後とも精進して参りたいと思います。

私の研究テーマは「顎顔面形態と咀嚼能力との関連性」です。特に、咀嚼機能異常があるとされる骨格性下顎前突症患者を対象としました。研究テーマの立案から論文の執筆まで初めてで戸惑いや苦労は多くありましたが、自分で一から行うことで考える力や読解力などを養い、様々なことを学ぶことができました。また、国内外で研究発表を行わせていただき、多くの場所を訪れ、出会いや異文化に触れることができたことも貴重な体験

でした。特に、大学院3年生の時にフランスのニースで開催された学会にて発表させていただいた際は、同期と二人だけということもあり、不安なことや苦労したこともたくさんありましたが、日本とは違う海外特有の雰囲気味わうことができ、掛け替えのない思い出となりました。

臨床と研究で慌ただしく大変な4年間でしたが、真摯に勉学に励めたのは、気軽に相談のできる同期や先輩、後輩の存在が大きいと思います。この4年間で学んだことを糧として今後より一層精進して参りたいと思います。最後になりますが、ご指導を賜りました齋藤功教授、指導医の坂上馨先生をはじめとする歯科矯正学分野の先生、包括歯科補綴学分野の小野高裕教授、ならびに同門の先生には心より御礼申し上げます。



## 大学院修了にあたり

新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔生命福祉学  
専攻博士前期課程2年 小松彩夏

この度、2年間の大学院生活もあとわずかになりました。この文章を執筆するにあたり、大学院入学から今までの2年間を振り返ってみることにしました。

私は歯科系・福祉系の研究ではなく、以前から興味を持っていた脳の研究を口腔生化学分野にて行いました。興味を持っていたとはいえ、脳に関して授業を受けたことはなかったため、基本的な知識が足りず論文や関連書籍を自力で読んで理解することから始めました。論文を読むにあたって、大学生までの生活で触れてこなかった専門用語と初めて英語で向き合うことになりました。数行読むでは関連書籍等で調べ、また論文を読み進めての繰り返しで1本の論文を読むのに時間がか

かってしまい、基礎知識を早く身につけたいのになかなか進まず焦る日が続きました。実験では仮説と全く違う結果が出て頭を抱えることや、思うように実験が進まず落ち込むこともありました。しかし、諦めずに日々の実験を頑張り日本神経化学会という神経化学を専門にした研究者が集まる学会に参加して発表をおこなうことができたことで、失敗に怯えず努力を重ねることが研究を行っていくにあたって重要なのだと実感することができました。

大学院修了後、私は後期課程への進学を予定しています。前期課程で学んだこと、また学び足りていなかったところを追求し、3年間頑張っていたと思います。

末筆となりましたが、2年間お世話になりました照沼美穂教授、前期課程での担当教員になっていただいたステガロク・ロクサーナ先生、またご指導いただきました先生方に厚く御礼申し上げます。



## 令和元年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻博士課程修了者論文名

博士の専攻分野の名称	氏名（専攻）	博士論文名
博士（歯学）	鈴木 絢子 （口腔生命科学）	Development of Microstructured Fish Scale Collagen Scaffolds to Manufacture a Tissue-Engineered Oral Mucosa Equivalent (マイクロパターン化した魚うろこコラーゲン足場材を用いた培養口腔粘膜の開発)
博士（歯学）	多賀 智治 （口腔生命科学）	更年期世代の女性における舌痛に関連する要因の検討
博士（歯学）	山崎 麻衣子 （口腔生命科学）	オトガイ神経損傷後の三叉神経節におけるBDNF産生について
博士（歯学）	SUYONO Benso Sulijaya （口腔生命科学）	The anti-inflammatory effect of 10-oxo-trans-11-0 ctadecenoic acid (KetoC) on RAW 264.7 cells stimulated with Porphyromonas gingivalis lipopolysaccharide. (Porphyromonas gingivalis LPS刺激RAW264.7細胞における新規機能性脂肪酸 KetoCの抗炎症作用)
博士（歯学）	溝口 奈菜 （口腔生命科学）	Association of hyper-low-density lipoprotein and hypo-high-density lipoprotein cholesterolemia with low salivary flow rates in Japanese community-dwelling elders (日本人地域在住高齢者における高LDL血症および低HDL血症と唾液流量低下との関連)
博士（歯学）	鈴木 裕希 （口腔生命科学）	Effects of sub-minimum inhibitory concentration of chlorhexidine gluconate on development of in vitro multi-species biofilms (Sub-MICのグルコン酸クロルヘキシジンがin vitro複合バイオフィルムに及ぼす影響)
博士（歯学）	Farah Ali Ibrahim Al-Omari （口腔生命科学）	Peri-Implant Bone Alterations under the Influence of Abutment Screw Preload Stress: an Animal Model (インプラントのアバットメントスクリューによるプレロードが周囲骨組織に与える影響)
博士（歯学）	高岡 由梨那 （口腔生命科学）	金属アレルギーと乾癬との関連に関する基礎的研究
博士（歯学）	清水 志保 （口腔生命科学）	Modulatory effects of repeated psychophysical stress on masseter muscle nociception in the nucleus raphe magnus of rats (情動ストレスは大縫線核(NRM)での咬筋侵害応答を増大させる)
博士（歯学）	中庭 麻友子 （口腔生命科学）	Primary cilia in murine palatal rugae development. (マウス口蓋皺壁発生における一次線毛の役割)
博士（歯学）	大澤 知朗 （口腔生命科学）	三次元CT画像を用いた骨格性下顎前突症患者における下顎骨偏位様相の検討
博士（歯学）	Supaluk Trakanant （口腔生命科学）	The role of microRNAs in midline formation during mandibular development (下顎正中形成におけるマイクロRNAの役割)
博士（歯学）	深町 直哉 （口腔生命科学）	全自動解析装置を用いた骨格性下顎前突症患者における咀嚼能力と顎顔面形態との関連
博士（歯学）	水越 優 （口腔生命科学）	Cellular Dynamics of the Periodontal Ligament During Orthodontic Tooth Movement. (矯正歯の移動中の歯根膜における細胞動態)
博士（歯学）	高地 いづみ （口腔生命科学）	Changes of bolus properties and the triggering of swallowing in healthy humans (健常者における咀嚼時食塊物性の変化と嚥下誘発)

博士の専攻 分野の名称	氏名（専攻）	博士論文名
博士（歯学）	古 志 奈緒美 （口腔生命科学）	Properties of hyoid muscle contraction during tongue lift measurement （舌挙上運動測定時における舌骨筋の筋活動特性）
博士（歯学）	竹 内 千華子 （口腔生命科学）	Effects of carbonated water on voluntary swallowing in healthy humans （健常者において炭酸水がもたらす随意嚥下運動への効果）
博士（歯学）	八 幡 晶 子 （口腔生命科学）	Comparison of the physical properties of coughing, huffing and swallowing in healthy adults （健常成人を対象とした咳嗽、ハフティング、嚥下の運動学的特性の比較）
博士（歯学）	吉 原 翠 （口腔生命科学）	Sustained laryngeal TRPV1 activation inhibits mechanically evoked swallows in anesthetized rats （麻酔ラットにおいて持続的TRPV1チャンネル活性化がもたらす機械刺激誘発性嚥下 の抑制）
博士（歯学）	上 原 文 子 （口腔生命科学）	Differentiation of Feeding Behaviors based on the Lissajous Analysis of Masseter and Supra-hyoid Muscle Activity （咬筋・舌骨上筋群筋活動様相の違いから摂食様式を判別する新たな試み）
博士（歯学）	兒 玉 匠 平 （口腔生命科学）	食塊量の違いが液体嚥下時の舌運動と舌圧発現様相に及ぼす影響 （口腔生命科学）
博士（歯学）	重 本 心 平 （口腔生命科学）	総合病院入院中の嚥下障害患者における栄養リスク状態に関連する因子 （口腔生命科学）
博士（歯学）	荻 野 奈保子 （口腔生命科学）	Evaluation of factors affecting health-related quality of life in patients treated for oral cancer （口腔がん患者の健康関連QOLに影響を及ぼす要因の評価）
博士（歯学）	小野田 紀 生 （口腔生命科学）	Evaluation of oral health related QOL in patients with temporomandibular disorders （顎関節症患者における口腔関連QOLの評価）
博士（歯学）	竹 内 涼 子 （口腔生命科学）	Exosomes from conditioned media of bone marrow-derived mesenchymal stem cells promote bone regeneration by enhancing angiogenesis （骨髄間葉系幹細胞培養上清由来エクソソームは血管新生を介した骨再生を促進する）
博士（歯学）	原 太 一 （口腔生命科学）	Comparison of three-dimensional facial morphologies acquired by digital stereophotogrammetry imaging and computed tomography （デジタル立体写真計測法とCTにおける三次元顔貌形態の比較）
博士（歯学）	西 田 洋 平 （口腔生命科学）	Vascularization via activation of VEGF-VEGFR signaling is essential for peripheral nerve regeneration （VEGF-VEGFRシグナル伝達系を介した血管新生は末梢神経再生に必須である）
博士（学術）	小田島 祐美子 （口腔生命科学）	75歳自立高齢者の肉の脂身を好んで食べる指向に関する考察 （口腔生命科学）
博士（歯学）	清 野 雄 多 （口腔生命科学）	Three-dimensional configuration of apical epithelial compartments including stem cell niches in guinea pig cheek teeth （モルモット臼歯における上皮幹細胞ニッチを含む形成端上皮コンパートメントの三 次元立体構築）

## 令和元年度 大学院医歯学総合研究科口腔生命福祉学専攻博士前期・博士後期課程修了者論文名

専攻分野の名称	氏名（専攻）	論文名
修士 (口腔保健福祉学)	小川 遥香 (口腔生命福祉学)	歯科矯正治療患者に対する歯垢染色後の口腔内写真を用いた口腔衛生指導の有効性
修士 (口腔保健福祉学)	沖津 佳子 (口腔生命福祉学)	歯科衛生士による専門的口腔衛生管理に要する時間と臨床経験年数との検討
修士 (口腔保健福祉学)	小松 彩夏 (口腔生命福祉学)	アンモニアを介した新規アルツハイマー病発症機序の検討
修士 (口腔保健福祉学)	横山 奈央 (口腔生命福祉学)	インプラント手術前の歯科衛生士による専門的機械歯面清掃が一過性菌血症に及ぼす影響
博士 (口腔保健福祉学)	高野 綾子 (口腔生命福祉学)	歯科衛生士が行う専門的な処置の所要時間の実態とその関連要因
博士 (口腔保健福祉学)	花谷 早希子 (口腔生命福祉学)	歯科衛生士の作業姿勢と筋骨格系障害の関連について
博士 (学術)	辻 友美 (口腔生命福祉学)	高齢者用食材への応用に向けた低温スチーミングを用いた豚肉の軟化



# 臨床研修修了にあたり

## 臨床研修修了にあたり

歯科研修医 沢田 詠見

2019年度歯科研修医プログラムAで研修いたしました。この場をお借りしまして、研修内容について記載したいと思います。研修施設を選択するための参考になれば幸いです。

業務内容は、診療、予診係、技工係があります。診療前にはプレチェックが必要であり、指導医の先生に治療内容をお伝えし、確認していただき、診療後にはフィードバックをいただきます。予診係は主に新患、急患対応を行い、技工係は歯科総合診療部の先生方のアシストを行います。同じ治療内容でも先生毎に異なる手技を何通りも拝見することができるため非常に勉強になります。また、毎週金曜日には歯科研修医へ向けたセミナーがあり、臨床に沿った知識を得ることができます。10月からは、保存科、補綴科、口腔外科それぞれの分野でCompetence Assessmentという診療を指導医の先生に評価していただく試験が始まり、合格すれば臨床研修修了へのワンステッ

プとなります。

さて、臨床研修修了後は即戦力が求められます。そのような中、歯科総合診療部には補綴系歯科、保存系歯科などの専門分野を経験された指導医の先生方がいらっしゃるため、それぞれの局面で専門性の高い考え方や治療内容を学ぶことができます。さらに、手技や考え方が間違っている場合、指摘とアドバイスをしてくださるためスキルアップを図れる大変恵まれた環境です。

これまで歯周治療、根管治療、歯冠修復、義歯製作、抜歯など多くの症例を経験しました。臨床研修では、歯科医師の基盤となる歯科治療の技術だけではなく、患者さんやスタッフとの関わり方、徹底した医療安全を学びました。今後は患者さんにとって最適な治療を提供できる歯科医師になれるように日々研鑽していこうと思います。

最後になりましたが、ご指導していただいた藤井先生、石崎先生、奥村先生をはじめとする総診スタッフの先生方、看護師さん、歯科衛生士さんの方々、同期の歯科研修医の先生方に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。今後ともよろしくお願いたします。



## 臨床研修修了にあたり

歯周病科 研修医 那 須 優 介

この度、歯学部ニュースの執筆を賜りました、本学49期卒業の那須優介と申します。臨床研修修了にあたり、私の研修生活について紹介させていただきます。

私は学内・学外の両方を見てみたいという思いから、本学の歯科医師臨床研修プログラムBに応募しました。学内の専門診療科は歯周病科、学外の研修先は大阪府の西尾歯科を選択させていただきました。

前半は、大阪府茨木市にあります開業医の西尾歯科でお世話になりました。西尾歯科は19台の診療チェアを備え、歯科医師が10数人在籍している非常に大きな医院です。私もその一員として、一般診療から矯正、インプラント手術まで幅広い症例を経験させていただきました。先生方の指導も手厚く、様々なことに前向きに挑戦できる、研修医にとって最適な環境でした。休日もよく出かけて大阪の街を満喫し、充実した毎日でした。卒業直後の段階でこの医院で研修できたことは非常に幸運であったと感じています。

後半は、本学の執筆現在も研修中の歯周病科です。歯周病科における臨床研修では、指導医の先生が担当している外来患者さんを一緒に診療させていただいております。開業医と比べて自分で手

を動かす機会はやや減りましたが、歯周病を専門とする先生方の診療をマンツーマンで教わり、学生の頃には考えの及ばなかった発想や知識を学ぶことのできる貴重な日々を過ごしています。また、本学研修医のための学会参加支援制度により、福岡で開催された秋季歯周病学会にも参加する機会をいただきました。臨床と研究に関する様々なトピックに触れ、歯科界への視野がぐっと広がり、今後の成長へのモチベーションが高まりました。

臨床研修を通して多くの尊敬する先生方に出会い、歯科医師としての自分の将来像を描くうえで様々な刺激を受けました。最後になりますが、今回の研修にあたってお世話になった皆様に、この場を借りて深く感謝申し上げます。臨床研修での貴重な経験を活かして、これからも精進していきたいと思っております。





## 旧歯科診療棟（F、G、H棟）の改修工事について

旧歯学部附属病院の建物は昭和48年に竣工し、その後、2回にわたる増築（昭和57年、平成9年）が行われました。平成15年に医学部附属病院と歯学部附属病院が統合され、医歯学総合病院が設置されました。平成24年の医歯学総合病院外来棟の新築後、歯学部校舎大型改修工事の一時移転場所として使用されていましたが、平成27年度の同改修工事の竣工後、空きスペースとなっていました。この跡地利用については本部主導のサウンディング調査により検討が進められましたが、成案が得られず、医歯学総合病院主導で跡地整備計画がすすめられてきました。令和元年秋より、旧歯科診療棟の改修工事が始まり、令和2年3月末に「新潟大学ライフイノベーションハブ」として

竣工予定となっています。この改修工事では、H棟をイノベーションセンターに改修し、旭町部局、全学センターの共通施設として使用し、また旧技工士学校、口腔外科診療室のあったG棟を取り壊し、その跡地を駐車場として整備することになりました。利用希望面積に応じて改修費用を案分し、工事費を賄うこととしましたが、歯学部ではこのうち204m<sup>2</sup>を使用することとし、F棟2階に106m<sup>2</sup>の講義室を、また3階に98m<sup>2</sup>の講義室を新設することとしました。計画では3階の講義室はスクール形式の講義に加え、アクティブラーニングを目指したWSや演習に対応できる教育設備を導入する予定にしています。

## 平成30年度科学研究費採択状況について

文部科学省は科学研究費助成事業の中区分別採択件数上位10機関、いわゆるトップテンランキングを公表しています。歯学部は昨年度は全国6位でしたが、2年間累積新規採択件数85件となり、今年度は5位となりました。累積新規採択率は

45.0%で、これは全国2位の採択率でした（1位は大阪大学で48.4%）。しかしながら、1課題あたりの配分額は1,869千円（全国7位）で、基盤研究Cから基盤研究B以上の申請の移行および採択が課題となっています。

## 文部科学省2019年度「国費留学生の優先配置を行う特別プログラム」の採択について

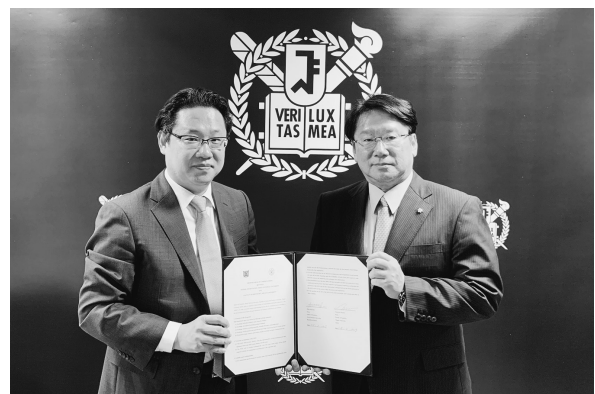
このたび、本学大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻が応募していた「超高齢社会における歯科医療リーダー養成プログラム」が文部科学省事業2019年度「国費外国人留学生の優先配置を行う特別プログラム」に採択されました（[https://www.mext.go.jp/content/1423005\\_1\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/1423005_1_1.pdf)）。この事業は国公立大学大学院が実施する国際的に魅力のある留学生受入れプログラムを文部科学省が選定し、優先的に国費外国人留学生の配置を

行うものです。本専攻は摂食嚥下障害治療や再生医療など先駆的な高齢者歯科医療の提供を行っており、このプログラムでは優先配置期間にASEAN諸国におけるリーダー候補の発掘とその育成を目指します。事業期間は令和2年1月から3年間で、毎年、国費留学生5名が配置されます。全国歯学部では本専攻を含め、3プログラムが採択されました。

## 大韓民国・ソウル国立大学歯学部との部局間交流協定締結について

新潟大学歯学部は大韓民国・ソウル国立大学歯学部と部局間交流協定の締結を行いました。10月3日（木）に前田歯学部長が同大学歯学部を訪問し、部局間交流協定書に署名を行いました。ソウル国立大学は多くの単科大学を前身に総合大学として1946年に設立され、3つのキャンパスに16学部、1大学院、9専門学校を配置し、17,000人の学部学生と11,000人の大学院学生を擁しています。2019年QSランキングでは大学として60位にランクされている韓国のトップスクールです。またソウル国立大学歯学部は1922年に設立された長い歴史をもつ歯学部であり、上海アカデミック世界ランキング2019では32位にランクされていま

す。本協定の締結により、歯学部学生の相互交流や教員、大学院生の研究交流が期待されます。



調印式後の記念撮影

## タイ・ナレスアン大学歯学部との 部局間交流協定締結について

新潟大学歯学部はタイ・ナレスアン大学歯学部と部局間交流協定を締結しました。タイ国歯学部との協定締結は9校目となります。11月19日（火）に前田歯学部長、魚島副学部長（国際担当）が同大学を訪問し、両学部の概要説明の後、Anuphan Sittichokechaiwut歯学部長と交流協定書に調印しました。調印式後には、魚島教授から「The overview of elderly dental care in Japan」と題する講演が行われました。ナレスアン大学はタイ中部のピサヌローク市に位置し、タイ国内で5位にランクされています。同歯学部は1997年に学生数30名として設置されまし

た、現在では5大講座にまで発展しています。ナレスアン大学歯学部との関わりは大学院教育改革支援プログラム（大学院GP）が採択された2008年まで遡ることができ、大学院GP時には事業推進協力校をお願いしていました。ナレスアン大学歯学部は幅広い学生交流に加え、教員間の共同研究を希望しています。なお、調印式開始前にKanchana Ngourungsi学長を表敬訪問し、同学長から実り多い国際交流推進を依頼されました。部局間交流協定を受け、4月より同大学歯学部から大学院生1名が口腔生命科学専攻に入学することとなりました（口腔病理学専攻）。



左上：両学部長による協定書の交換、右上：ナレスアン大学学長との記念撮影  
下：交流協定調印式後の記念撮影

## インドネシア・スマトラウタラ大学歯学部、 ハントゥア大学歯学部との部局間交流協定の締結について

令和2年2月10日に、かねてより海外交流の要望が寄せられていたインドネシア・スマトラウタラ大学歯学部とハントゥア大学歯学部と部局間交流協定を締結しました。

スマトラウタラ大学歯学部は1961年に設置され、インドネシア北スマトラ州メダンに位置する国立大学歯学部で、またハントゥア大学歯学部は1998年に設置され、東ジャワ州スラバヤに位置す

る私立大学歯学部です。両大学ともに本学歯学部との交流はこれからですが、先方は歯学部学生交流を中心としたネットワーク形成、基礎研究にかかる技術指導、大学院生・教員の研究交流などの活発な交流を望んでいます。この2校との協定締結により、インドネシアの歯学部との部局間交流協定校は6校となりました。



スマトラウタラ大学歯学部（左）、ハントゥア大学歯学部（右）との調印後の記念写真



## 大韓民国・延世大学歯学部とのダブルディグリー プログラム協定の締結について

新潟大学歯学部と延世大学歯学部はこれまで、本年4月に部局間交流協定を締結するなど交流を深めてきましたが、このたび本歯学部と延世大学歯学部は、本学大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻と同大学大学院歯学研究科のダブルディグリープログラム開設に合意し、協定を締結しました。10月4日（金）に協定式が行われ、前

田歯学部長、魚島副学部長が同大学歯学部を訪問し、協定書に署名を行いました。このダブルディグリープログラムは大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻では初めて開設されるものです。本プログラムにより両大学で教育・研究指導を受けた大学院生に両大学から学位が授与されます。



協定締結式後の記念写真

## 国際シンポジウム (International Collaborative Symposium on Development of Human Resources in Practical Oral Health and Treatment) 開催報告

予防歯科学分野 小川 祐 司

2020年2月10日から12日まで(12日はコミュニティツアー)、インドネシア・バリ島にて、新潟大学歯学部主催、インドネシア・ガジャマダ大学歯学部共催による国際シンポジウム「International Collaborative Symposium on Development of Human Resources in Practical Oral Health and Treatment」が開催された。現代社会に対応する実践的口腔医療人の育成がメインテーマの本シンポジウムは今回で9回目となり、日本をはじめインドネシア・タイ・ベトナム・ミャンマー・韓国・台湾・香港・フィリピンから105名の参加となった。

開会式では、前田健康歯学部長、Ahmad Syaifyガジャマダ大学歯学部長による歓迎の挨拶が行われ、続けて参加大学歯学部長による記念撮影が行われた。その後の基調講演では、タイ・コンケン大学Waranuch Pitiphath歯学部長と小野高裕教授の座長のもと、北アイルランド・ベルファスト大学Gerry McKenna先生による「高齢者に対するエビデンスベースの治療方針の確立」が披露され、急速に進む高齢化のなかで口腔保健サービスのあるべき形態が提言された。

特別講演では、本学4名の演者による講演が行われ、大峯淳教授による「マウス切歯における幹細胞について」、照沼美穂教授による「人体におけるアンモニアの産生と代謝のメカニズム」、岡本圭一郎准教授による「日本文化を紹介します！酒は百薬の長か?」、加来賢准教授による「歯根膜の組織幹細胞」と、最新の知見を盛り込んだユニークな内容構成となった。

また、1日目と2日目に各2つの学術シンポジウムが行われた。シンポジウム1は、「高齢者歯科と摂食嚥下—最近の知見」(座長：井上誠教授、

タイ・タマサート大学Matana Pruksapong先生)と題し、真柄仁講師による「舌圧計測に伴う舌挙上運動時における舌骨筋活動の特徴」、Sirima Kulvanich大学院生による「私たちは咀嚼中の嚥下のタイミングをどのように決めているのか?」、坂井遥特任助手による「摂食嚥下障害入院患者における経口摂取獲得のための口腔機能の影響」、長谷川陽子講師による「高齢者の内服薬剤口腔内残渣予防のための基礎調査」と興味深い発表とともに活発な議論が行われた。シンポジウム2「地域における高齢者口腔保健」(座長：タイ・スラナリー工科大学Yupin Songpaisan歯学部長、小川祐司教授)では、葭原明弘教授による「口腔健康状態と認知症および認知機能低下との関連」、ガジャマダ大学Lisdrianto Hanindriyo先生による「インドネシアにおける高齢者口腔保健の展開」、タマサート大学Matana Pruksapong先生による「タイにおける高齢者口腔保健の実践；集中治療室、中間介護施設、長期介護施設での経験を踏まえての研究課題」が披露され、アジアにおける高齢者口腔保健の課題と取り組みが議論された。

シンポジウム3は、「歯周病学における現在のトピックス—進歩と課題」(座長：多部田康一教授、インドネシア大学Benso Sulijaya先生)と題し、多部田康一教授による「歯周治療の現在と未来」、高橋直紀講師による「歯肉上皮細胞をターゲットとした host modulation therapy の可能性」、インドネシア大学Benso Sulijaya先生による「機能性メタボライトを用いた host modulation therapyによる歯周炎治療の現状と将来性」、インドネシア大学Yuniarti Soeroso先生による「インドネシア大学歯学部病院におけ

る他疾患を併発する歯肉増殖症治療」の発表が行われ、歯周病学研究の指針を議論する意義深い内容となった。さらにシンポジウム4は、「最新歯科トピックス・ガジャマダ大学の知見」（座長：ガジャマダ大学Ahmad Syaify歯学部長）のもと、Juni Handajani先生による「口腔上皮細胞における加齢とサイトケラチンの産生」、Trianna Wahyu Utami先生による「インドネシアにおける非木材生産物の植物由来の生理活性成分としての検討」の興味深い講演が行われ、活発な質疑が繰り広げられた。

そのほか、32のオーラル発表と17のポスター発表が行われ、大学院生や若手研究者が英語でのプレゼンテーションに挑戦し、討議を通じて英語力向上を目指す格好の機会となった。

2日目のランチタイムには、参加学部長（代理を含む）を囲んでの新潟大学／ASEAN歯学部長会議が行われ、ガジャマダ大学、コンケン大学、チュラロンコン大学、タマサート大学、チェンマイ大学、マヒドン大学、スラナリー工科大学、ナレスアン大学、インドネシア大学、マラナタクリスチャン大学、モエストポ大学、トリサクティ大学、スマトラウタラ大学、ハントウア大学、国立台湾大学、台北医科大学、香港大学、ハノイ医科大学、ソウル中央大学、ベトナム医科薬科大学、ヤンゴン歯科大学、マングレー歯科大学、マニラセント

ラル大学、ベルファスト大学（オブザーバー）の計24大学の出席のもと、新潟大学歯学部と交流協定締結校の間で実施している学部学生、大学院学生、教員の人材交流に関する実績報告のほか、国費留学プログラムを含めた次なるシフトアッププログラムに関して活発な意見交換が行われた。また新作の新潟大学歯学部プロモーションビデオが披露され、参加学部長から称賛の拍手が送られた。

新型コロナウイルスの感染拡大が懸念される最中での開催となったが、2日にわたっての国際シンポジウムは盛会のもと無事に閉会を迎えることができた。

（開催にあたりご尽力賜りました皆様に改めて御礼申し上げます）



閉会式にて



シンポジウム会場にて



新潟大学／ASEAN歯学部長会議

## 超高齢社会に求められる基礎・臨床研究 Basic and clinical researches required in a super aged society

### 摂食嚥下リハビリテーション学分野

井 上 誠

さくらサイエンスプランとは、日本・アジア青少年サイエンス交流事業として産学官の緊密な連携により、優秀なアジア地域の青少年が日本を短期に訪問し、未来を担うアジア地域と日本の青少年が科学技術の分野で交流を深めることを目指して日本科学技術振興機構が行っている事業です。本事業の推進により、アジア地域の青少年の日本の最先端の科学技術への関心を高め、日本の大学・研究機関や企業が必要とする海外からの優秀な人材の育成を進め、もってアジア地域と日本の科学技術の発展に貢献することを目的としています (<https://ssp.jst.go.jp/index.html>)。

新潟大学歯学部では、さくらサイエンスプランの支援により、2020年2月13日から19日まで、フィリピン・マニラセントラル大学より1名、タイ・タマサート大学より1名、タイ・マヒドン大学より1名（他来日経験者1名）、タイ・コンケン大学より4名、インドネシア・ガジャマダ大学より3名、ミャンマー・マンダレー歯科医学大学より2名の若手歯科医師を受け入れ、現在新潟大学で行われている臨床の見学、講義受講ならびに体験実習を行いました。過去3回の内容はこちらでご覧になれます (<http://www5.dent.niigata-u.ac.jp/~dysphagia/sakura.html>)。

プログラムは、全員が来学した2月13日にオリエンテーションを実施した翌日の2月14日にスタートしました。2月14日午前中は、摂食嚥下リハビリテーション学分野担当でした。摂食嚥下障害の臨床をテーマとして、超高齢社会において高齢者を中心とした摂食嚥下障害の現状と一般的な臨床内容、さらに歯科医療が携わるべき口腔機能を起点とした臨床のあり方についての講義を行いました。

午後は、包括歯科補綴学分野担当でした。臨床における咀嚼の重要性に関する講義の後に、グミゼリーを用いた咀嚼能率測定の実験実習を行い、咀嚼障害者の食塊形成の悪さ、嚥下への負担を疑似体験してもらいました。この日の夕方には、親睦を深めるための懇親会も開催され、初日であったにも関わらずお酒が入るとともに会は盛り上がり、それぞれの国や研究の話だけでなく、文化交流という点でも大変有意義な時間となりました。

2月15日午前中は、口腔生理学分野担当でした。痛みのメカニズムに関する講義の後、痛みのモデル動物を用いた行動学的な実験を観察・定量化する生理学実験を経験してもらい、得られた結果と痛みメカニズムの関連性を議論しました。午後は、予防歯科学分野の担当として、高齢化に向かう社会の中で必要とされるヘルスプロモーションに関する講義を行いました。

日曜日の休日をはさんだ2月17日は、摂食嚥下リハビリテーション学分野担当日でした。午前中は、病棟での摂食嚥下障害の臨床見学ならびに嚥下内視鏡検査や嚥下造影検査体験をしてもらいました。嚥下を可視化する実習体験は初めてのことであり、皆が大変興味を示してくれました。午後は2班に分かれて、経頭蓋磁気刺激（TMS）実験と口腔機能低下症の検査実習を行いました。TMS実験では、自らが被験者となって誘発電位を体感してもらい、その都度大きな歓声があがっていました。口腔機能低下症の検査は相互実習で行われ、慣れない検査であるオーラルディアドコキネシスでは、何名の参加者がテストをパスできずにいましたが、大丈夫でしょうか。午後4時から、う蝕学分野の吉羽永子先生にデンタルシミュ



レータを紹介してもらいました。完全なバーチャルリアリティのシステムを用いた切削トレーニングとその自動評価について学んだ後、仮想患者の診断・治療計画・治療までを体験してもらいました。歯の切削感はもとより、露髄をすると出血するなど、そのリアルさに感動していました。

2月18日は、生体歯科補綴学分野担当日でした。午前中は主にインプラント治療と天然歯の保存について臨床的な観点からの講義を行いました。午後はインプラント関わる生物学的研究、新規生体材料の開発、歯根膜の幹細胞等、生物学的なエビデンスに基づく補綴治療の実現を目指した研究の紹介を行い、研究サンプルの一部を実際に見てもらいました。参加者からは多くの質問があり、活発な議論が行われました。

最終日の2月19日午前、歯周診断・再建学分野担当でした。誤嚥性肺炎の原因菌ともいえる口腔内細菌のコントロールのためにも口腔衛生管理

が必要となることを、症例を交えながら講義しました。また、実際に参加者の口腔内細菌数を測定するハンズオンを行いました。国や専門は違いますが、歯周病への認識は同じであり、超高齢社会における歯科医の役割を全員で共有することができました。

その後の閉講式では参加者から一言ずつのコメントをもらい、全員で記念写真を撮って解散となりました。タイトなスケジュールの中、参加者は新たな臨床、研究分野の体験を楽しみ、また一生懸命に参加してくれたことで忙しくも充実した日々を過ごすことができました。本プログラムをきっかけとして、さらなる交流や共同研究推進への足掛かりができたと確信しています。

最後に、本プログラム実施の機会を与えた頂いたさくらサイエンスプラン、そして本プログラムの実施を支えて頂いた多くのスタッフの皆さんには深く感謝申し上げます。



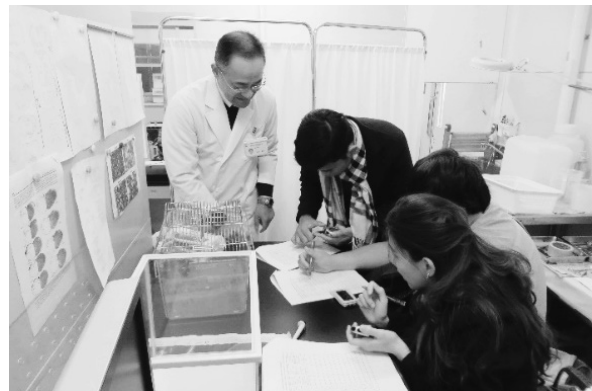
講義



嚥下内視鏡検査見学



TMS体験



実験データ採取



口腔機能低下症の相互実習



デンタルシミュレータ体験



口腔細菌検査体験



咀嚼機能検査体験

## タイ・協定校での学術講演セミナーの開催

部局間協定締結校からの依頼を受け、これまで若手教員の育成を兼ね、姉妹校で学術交流を行ってきましたが、本年度はASEAN地域で興味が高まっている高齢者歯科学に焦点をあて、研究者交流セミナーを開催しました。歯学部協定校であるタイ・タマサート大学およびチュラロンコン大学歯学部で、9月24日（火）、25日（水）の両日、摂食嚥下リハビリテーション学分野の井上誠教授と包括歯科補綴学分野の小野高裕教授が学術セミナー講演会を開催しました。本セミナーは、タイを始めとする東南アジア諸国でも高齢化が進み高齢者歯科学への関心が高まっている中で、同大の

歯学部長から特に依頼を受け、開催に至りました。セミナー当日は、井上教授から嚥下障害と口腔機能低下症について、小野教授から舌接触補助床（PAP: Palatal Augmentation Prosthesis）の効果について、それぞれ豊富な臨床例ならびに研究成果を交えながら講演が行われました。また、タマサート大学では、摂食嚥下リハビリテーション学分野のスタッフによる嚥下機能に関するワークショップや、小野教授による実際の患者さんに対するPAP作成のデモンストレーションも実施されました。



## 令和元年度 Student Dentist 認定証授与式・臨床 実習登院式について

令和元年10月4日（金）に、Student Dentist 認定証授与式及び臨床実習登院式を行い、5年次前期までの科目をすべて修め、共用試験CBT・OSCEに合格した学生37名が出席しました。Student Dentist 認定証授与式では初めて大内章嗣副学部長による訓示があり、Student Dentist制度や診療参加型臨床実習の目的などが述べられました。訓示の後には37名の学生にStudent Dentist 認定証及び診療衣が授与さ

れ、代表学生が今後の実習に向けての決意を宣誓しました。引き続き行われた臨床実習登院式では、小林正治医歯学総合病院副院長、藤井規孝臨床実習実施委員長から、医療人としての態度や実習に臨む姿勢についてお話がありました。約1年間に及ぶ診療参加型臨床実習が実りあるものになるよう、実習にご協力くださる患者様への感謝の気持ちを忘れずに、学生が真摯な態度で取り組むことを期待しています。

## 学部長と学生との懇談会の開催について

令和元年12月9日（月）に学部長と学生との懇談会を開催しました。

この懇談会は、歯学部長からの話題提供や学生からの要望についての意見交換を行い、学部運営に役立てることを目的とするとともに、意識の共有を図る機会として毎年開催されています。今

年度は前田学部長、大内副学部長と各学科・学年の代表者1～2名及び事務職員が参加し、校舎内の自習室や更衣室、学部の授業やカリキュラムに関してなど、さまざまな話題や要望について意見交換を行いました。

## 特別研究員等審査会専門委員 （日本学術振興会）の表彰について

本学歯学部口腔生理学分野の山村健介教授が、特別研究員事業及び国際交流事業の審査において有意義な審査意見を付した専門委員等として、独立行政法人日本学術振興会から表彰され、12月13日（金）に本学の高橋学長から表彰状を手渡されました。日本学術振興会では、特別研究員事業等の審査の質を高めるため、審査終了後、審査の検

証を行い、その結果を翌年度の専門委員及び書面審査員の選考に適切に反映させています。検証結果に基づき、書面審査において有意義な審査意見を付した専門委員等を選考し表彰することとしており、今年度は約1,500名の専門委員等のうち、表彰対象者の一人として山村教授が選考されました。

## ミャンマー・ヤンゴン歯科大学への 医療チーム派遣

新潟大学歯学部はミャンマー・ヤンゴン歯科大学と部局間交流協定を締結していますが、Thein Kyu前学長、Shwe Toe学長より、ミャンマーで患者の多い口唇口蓋裂患者に対する医療支援が要望されていました。昨年度に引き続き、顎顔面口腔外科学分野の高木律男教授と歯科麻酔学分野

の瀬尾憲司教授による合同医療チームがミャンマーでの医療支援活動を行いました。ミャンマーでは医薬品等が不足しており、いろいろな分野からの支援を必要としていますので、皆様方のご理解とご協力をお願い致します。

## 留学生交流支援制度（短期受け入れ及び短期派遣プログラム）の採択について

独立行政法人日本学生支援機構（JASSO）が公募していた留学生交流支援制度の採択結果2020年度分）が通知されました。歯学部から短期派遣事業（短期研修・研究型）として応募していた2プログラムが採択されました。

この留学生交流支援制度を用いた学生の海外短期派遣・受け入れは、平成23年度より開始され、

平成30年度末現在で短期派遣された学生の延べ人数は215名、受け入れ延べ人数は250名となっています。特に第三期中期目標期間が開始された平成28年度からの3年間でそれぞれ117名、130名となっています。異文化への理解、国際交流に興味のある学生の積極的な応募を期待しています。



## SSSV参加報告

### サマーコースに参加して

歯学科3年 村山未帆

私は夏休みの期間に2週間、SSSVのプログラムでインドネシアのガジャマダ大学サマーコースに参加させていただきました。

8月18日に小川教授の引率のもと、ジョグジャカルタの空港に到着致しました。東南アジア特有の空気に包まれた瞬間、SVが始まるのだという実感とともに大きな楽しみと少しの不安が生まれました。

サマーコースは新潟大学からの単独派遣とは異なり、日本からは徳島大、九州大からの学生と、他国からはインドネシアのジャワ島、バリ島、スマトラ島の学生とマレーシアからの学生が集まって、レクチャーやディスカッション、実地研修を行うものです。サマーコースは様々な大学と地域から学生が集まっているためたくさんの交流があり、またそれぞれの文化や歯科教育の違いについても知ることができます。



19日からサマーコースが始まり、初めの1週間のプログラムの内容としては、予防歯科小川教授の講演をはじめ、ガジャマダ大学の先生方からの講演や歯磨き粉の製作実習、ハーブ工場の見学（インドネシアでは現在でもハーブによる伝統的な治療が根強く残っているため）などを行いました。

その後2週目は小学校での歯科健康教育指導や public health centerへの訪問を致しました。public health centerは日本で言うと、保健所と区役所や地区事務所（地区センター）の両方の役割を担っている施設で、治療だけでなく、ヘルスプロモーションや小学校への歯科検診、地域住民の全ての家庭を訪問しての健康調査および分析などを行なっています。public health centerは多くの仕事を抱えているものの、金銭面や人材面が非常に不足しており、困難が多い印象を受けました。

最後に新潟大学の予防歯科に所属していたDrian先生、Dita先生のお宅に2泊させていただきました上、滞在中も先生方には大変お世話になりました。暖かく迎えて下さる先生方や学生の皆様のおかげで、非常に充実した学び多い研修となりました。

加えてこのように貴重な機会を与えて下さった魚島教授、石田先生をはじめとする新潟大学の先生方、引率して下さった小川教授、ガジャマダ



大学のDrian先生、Dita先生をはじめとする先生方や学生の皆さんにこの場をお借りして深く感謝申し上げます。



## チュラロンコン大学SSSV報告

歯学科5年 赤羽根 開 成  
歯学科5年 遠 藤 和 樹

私たちは今年1月にタイのバンコクにあるチュラロンコン大学への短期留学に参加させていただきました。

研修内容は、歯学部校舎や病院、キャンパスの案内から始まり、各診療科や学生の臨床実習の見学をしました。現在新潟大学で行っている臨床実習とは異なる点が多くあり、とても興味深いものでした。

その中でも特に印象に残ったことが2つあります。

1つ目は矯正診療科での見学です。タイでは日本より多くの人々が矯正治療を行っていて、歯並びがよい人を多く見かけることができます。その理由としては矯正治療の価格と人々の矯正治療に対する価値観の違いによるということを知りました。矯正治療は日本では約100万円するのに対してタイでは約12万円で治療を受けることができます。また、日本では矯正治療をしていることを隠したがる人が多くいるのに対して、タイでは矯正治療をしていることに誇りを持っている人が多いです。例えば、日本では矯正用のゴムは白色が基本ですが、タイでは矯正用ゴムがカラフルであり、患者さんが気分によって変えることができるそうです。

2つ目はモバイルクリニックの見学です。マンマーとの国境の近くの歯科医院がない田舎の地

方にバスで訪れ、スケーリング、CR・アマルガム充填、抜歯の3つを無料で地域住民に提供しているところを見学しました。その治療に必要な経費は王族の方がプレゼントしてくれているようで、その王女様とも実際にお会いすることができました。超高齢社会がますます深刻化する日本の、特に歯科医院が少ない地域における地域医療についてさらに深く考えさせられるきっかけとなりました。

改めましてこのような貴重な機会を提供していただいた先生方に感謝し、この経験を活かして残りの学生生活も全力で勉学に励みたいと思います。





# SCRP参加報告

## SCRP活動報告

歯学科4年 相澤知里

この度2019年8月23日に東京都にあります歯科医師会館にて行われました、令和元年度スチューデント・クリニシャン・リサーチ・プログラム(SCRP)日本代表選抜大会に出場いたしました。摂食嚥下リハビリテーション学分野の井上誠教授をはじめ多くの方々のご指導のもと無事に発表を終え、臨床部門において第2位をいただきました。

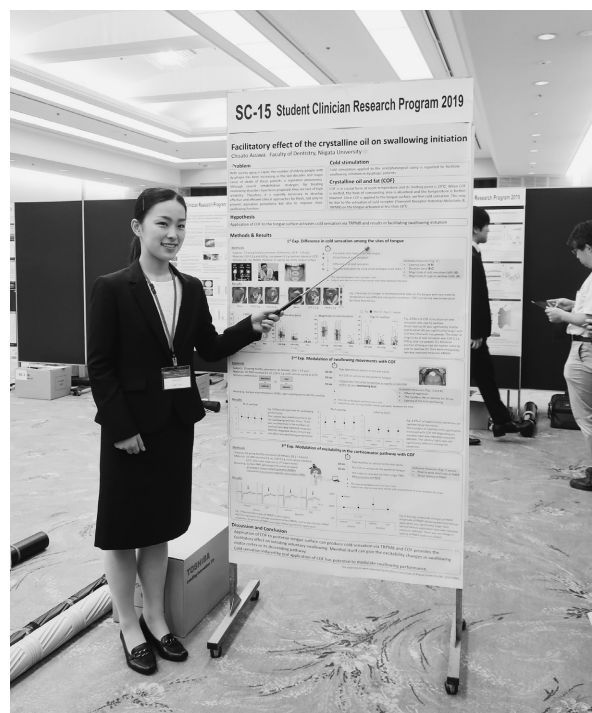
「嚥下障害を持つ患者において口腔、咽頭領域への冷刺激が嚥下誘発を促進する」という過去の論文をもとに、室温で結晶を構成し29度の融点を持ち舌上で冷感を発生させる結晶性油脂(Crystalline oil and fat, COF)を用い、①舌の各部位における冷感の違い、②COFがもたらす冷感による随意嚥下運動の変化、③COFの投与による皮質運動路の興奮性の変化について調べました。結果として奥舌へのCOFの投与はTRPM8を介し冷感を発生させ随意嚥下運動を促進させること、またそれには皮質運動路以外の何らかの皮質領域が関わっているだろうということが明らかとなりました。超高齢社会である日本では嚥下障害を抱える高齢者が増え続けています。より効果的な臨床的アプローチの開発は、誤嚥性肺炎の予防のみならず生活の質の観点からも

急務であると考えます。この度の結果はその大きな第一歩になったと感じています。

SCRP大会を終えた今も、充実した日々が鮮明に思い出されます。関連のある様々な論文を読み疑問点を整理しそれらを明らかにしていく中で、新たな発見が生まれるたびに心を弾ませていたのを覚えています。本研究に夢中になり最後までやりきることができたのは、専門的な知識の未熟な私に丁寧にご指導くださった先生方、快く実験に協力してくださった方々の支えがあったためであると感謝しています。心より感謝申し上げます。

審査本番の研究発表は、程よい緊張感の中で大いに楽しむことができました。英語を通して自分の考えを伝えられたり質問に答えることができたことは、本当に嬉しく自信を持つことができました。

この度の経験は、私の一生の宝物になりましたし、これからの励みになると思います。感謝の気持ちをお忘れずに、今後更に気を引き締めて精進して参ります。



## SCRP活動報告

歯学科4年 岸本奈月

この度、共同研究者としてSCRPに参加させていただきましたので、報告いたします。

実は私は、編入して本学歯学部へ入りました。おそらく学生の多くが研究活動は初めて行うという状況のなか、私は既に博士号を取得しており、立場が少し特殊です。編入前は本学にて摂食嚥下リハビリテーションの臨床に携わり、また、経口摂取が口腔環境にもたらす影響について、研究させていただいたこともあります。編入後はただ学生生活を送るだけでなく、これまでの経験を生かし研究なども行いたいと考えていたので、このような機会をいただけたことは大変ありがたいことです。

私たちは、「結晶性油脂がもたらす嚥下誘発促進効果」をテーマに、研究を行いました。実験に用いた結晶性油脂は、融点が29℃であり、融解する際に強い冷感があります。実験により、本油脂により随意嚥下回数は有意に増加し、併せて咽頭筋誘発電位を記録することで、これは末梢への冷刺激のみならず、随意嚥下運動にかかわる中枢性

の興奮性変化をもたらす可能性がある、という興味深い結果が得られました。嚥下訓練のひとつとしてアイスマッサージが広く知られていますが、この油脂はその融解度の特性により、摂食嚥下障害患者へ用いる安全性の高い食材としての応用が期待できそうです。

筆頭研究者の相澤さんはこのような研究発表は初めてということでしたが、その姿勢は本当に前向きで、研究を「自分のもの」にしていたことがとても印象的でした。研究発表、特に質疑応答は、研究内容・意義を真に理解していなければ満足に行くことはできません。大会前日に行った予演で原稿も見ずに堂々と発表する姿を見て、もし私が現役の学部生であったら、ここまで主体的に取り組み、難しい内容をしかも英語で、自信をもって発表することができただろうかと、襟を正される思いでした。

今回SCRP出場に際し研究に取り組めたことは、今後歯科医師としてどのように社会に貢献できるか考えるうえで、大きな経験のひとつとなりました。

最後になりましたが、熱心にご指導くださいました井上誠教授はじめ摂食嚥下リハビリテーション学分野の先生方に、心より感謝申し上げます。



## ジャパン・ビジネスモデル・コンペティション 新潟ラウンドの報告

### JBMC新潟ラウンド第四北越FG 賞を受賞して

健康歯ブラシチーム代表  
歯学部歯学科2年 林 幸穂

この度、我々「健康歯ブラシ」チームはJBMC新潟ラウンドにて歯ブラシに関するビジネスプランを発表させていただきました。このプランは、我々のチームで考えたこれまでにない歯ブラシで、「人々のお口と全身の健康を守る」というものです。そして審査の結果、第四北越FG賞という素敵な賞を頂くことができました。また、歯学部ニュースに掲載させていただく機会もいただきました。本当にありがとうございます。ここでは、出場した時の私の想いを述べさせていただきます。

私が今回この大会に出場するにあたって考えていた目標が2つあります。

1つ目は、このプランを通して「歯の大切さを色々な人に知ってもらうこと」です。今回のプランに向き合う際、歯学部生として何ができるのかということを考えました。その中で、歯への興味関心が高い人ばかりが歯を守るということと向き合っているのではないかと思いました。私は、歯に少し興味があるけど歯のケアとそれほど向き合っていない人にこそ歯の大切さを訴えかける必要があると考えています。このような思いから、チームの先輩方とそういった方により歯を大切にしてもらえるようなプランを考えました。実際にその反響はとて大きく、審査員や会場の方からも歯についての話で盛り上がりました。今後も、たくさんの方に歯を大切にしようと思っただけのようなアクションを起こしていけたらと思います。

2つ目は、「新たな挑戦に果敢に挑む」ことでした。歯学部生である私にとって、ビジネスプランを考えるということが大きな挑戦でした。何度も自分の未熟さを実感し、困難にぶつかりました。しかし、そんな私を支えてくださる方々がいました。それは、「健康歯ブラシ」チームのメンバーである先輩方でした。先輩方はお忙しい中、休む暇も惜しんでプランのブラッシュアップやプレゼン準備を一緒にしてくださいました。そんな輝いている先輩方の背中を見て私もさらに奮闘することができました。先輩方と一緒にこのチームだったからこそ、私は大きな挑戦に最後まで挑むことができたのだと思います。

そして、一緒に戦いCLOVE賞を受賞した「母から子へ『健康を遺伝』させる歯ブラシ」チームの存在も私にとって大きなものでした。それぞれのチームでは見えていないことも、双方のプランをシェアし合うことでより良いものへと高め合うことができました。仲間であり良きライバルでもあるこのチームと一緒にいたからこそ、両チーム素敵な賞をいただくことができたのだと思います。

私は、この大会を通して素敵な仲間と協力し合い作り上げることの素晴らしさ、大切さを改めて強く実感しました。双方のチームメンバーや協力



してくださった仲間達には本当に感謝申し上げます。この経験を生かして将来良い歯科医師になれるよう日々頑張っていきたいと思います。

最後になりましたが、今回出場するにあたって

検証にご協力いただいた方、応援してくださった先生方、家族、友人に本当に感謝申し上げます。

これからは、次の全国大会へ向けてさらに頑張っていきたいと思います。



## 「ジャパン・ビジネスモデル・コンペティション新潟ラウンドの報告」

歯学部口腔生命福祉学科2年 花 沢 愛 莉

今回、私達のチームは「母から子へ健康を遺伝させる歯ブラシ」と題して、妊婦さんに優しい歯ブラシを提案させて頂き、ICLOVE賞を受賞致しました。私達のチームは新潟大学歯学部の女子学生で構成されており、将来母親になりうる私達だからこそ、歯科の分野から妊婦さんをサポートすることができるのではないかと思います、このようなテーマで発表致しました。

日本は少子化が進み、一人の女性が生涯に産む子供の数はピーク時の約半分になっているという問題を抱えています。さらに、少子化が進む中、低体重で生まれてくる子供の割合は増えており、この低体重児出生のリスクを高める原因の一つに歯周病があること、そして妊婦さんは歯周病になりやすいことから妊婦さんが歯磨きしやすいような歯ブラシがあればこの問題を少しでも解決できるのではないかと考えました。そこで私達は、妊婦と聞くと誰しもが思い浮かべる「つわり」の影響で妊婦さんが歯磨きしづらいという現状があるのではないかと仮説を立て仮説検証を行いました。現在妊娠中の方や妊娠を経験した方への妊娠期の歯磨きに関するアンケート調査や、妊婦さん個人へ直接歯磨き・歯ブラシに関する意見をお聞きするといった仮説検証を行い、妊婦さんは歯

磨きしたいと思っているのに困難な現状があることが分かりました。

このことから、妊婦さんのための歯ブラシが必要であることを再認識し、妊婦さんが使いやすい歯ブラシとは何かについて考えました。そして最終的に、ヘッドの大きさや毛の種類、硬さ、柄の材料、さらにデザインにこだわった歯ブラシを提案させて頂きました。特にこだわったのが柄の材料とデザインです。柄の材料には竹を使用することで、妊婦さんに優しい化学物質を使用しない歯ブラシを目指しました。デザインでは、歯周病になりやすい妊婦さんに正しい歯ブラシの交換頻度である1か月1回交換を推進するためのデザインを考案しました。

大会では、多くの方々から質問やアドバイスを頂き、もう一度この案を見直す良い機会となりました。また他の参加チームの発表からも刺激を受け、自分達の足りない所を知ることができました。私達は歯学部生であるため、経済学の知識がゼロの状態からのスタートで、分からないことやつまづくことが多くありました。しかし、チームメンバーはもちろん、様々な方のご協力のおかげでこのような素敵な賞を受賞させて頂けたこと、そして歯科の分野ではない方々に少しでも歯について興味を持っていただけたことが何より嬉しかったです。今回、未熟な私達がこのように発表する機会を頂いたこと、そして関わってくれたすべての方々に感謝して今回得た知識や経験をこれからの将来に活かしていきたいです。

## 第52回全日本歯科学生総合体育大会に向けて

大会副会長 山 村 健 介

本年、新潟大学歯学部が事務主管校（前田健康大会長）となり第52回全日本歯科学生総合体育大会が開催されます。全日本歯科学生総合体育大会（通称オールデンタル）は、1968年に第一回大会が開催されてから毎年開催されている歯学生のスポーツの祭典で、国内全ての大学歯学部・歯科大学（29校）から7000名近い歯科学生が参加しています。各（競技）部門ごとに優勝校から順に得点を与え、合計得点で総合優勝校が決定されます。福岡歯科大学が事務主管校をつとめた昨年の51回大会では冬期3競技、夏期23競技が行われ、九州歯科大学が総合優勝を果たしました。新潟大学は13競技に参加し、卓球部、弓道部、バレーボール部、陸上部、硬式庭球部が得点を獲得し、総合16位という結果でした。他の大学に比べ学生数が少ないことを鑑みると大健闘と言って良い結果ではないかと考えます。本年も昨年以上に新潟大学歯学部の学生さんが活躍することを祈念しています。

ところで、オールデンタルは、29歯学部を地区別に7つのブロックに分け、各ブロックが輪番で大会を主催します。新潟大学は、愛知学院大学・日本歯科大学新潟生命歯学部・松本歯科大学とともに第5ブロックに属しています。今年は第5ブロックが大会を主催することになっているわけですが、実は主催校の中でも主たる主催校、すなわち事務主管校を輪番で決めています。ほぼ29年ごとに事務主管校が回ってくる計算になりますが、前回新潟大学が事務主管校をつとめたのは私の記憶では1986年ではなかったかと思います。実に34年振りの事務主管校で、学生さんは勿論、教員、事務職員にも全く開催のノウハウがありません。それに加え、今年は2020東京オリンピック・パラリンピックが7月24日から9月6日にかけて開催されます。こ

の期間は例年オールデンタルの夏期競技が開催される時期と重なっており、会場や宿泊施設の確保の困難が予想されたこと、オールデンタルの後援であるスポーツ庁から全国の大学にオリンピック・パラリンピック期間中の大会開催の自粛の要望が出されたことなどから52回大会の準備は難航しました。各大学との調整の結果、夏期競技部門は例年の開催期間にとらわれることなく、部門ごとに開催期間を決めることになり、例年夏期に開催される硬式庭球、バドミントン、バレーボール、バスケットボールなどが3月に開催となり、他の競技も5月から9月にかけて競技部門ごとの分散開催となっています。この場をお借りして、他大学教職員との調整に尽力くださった、学務係をはじめとする事務の方々、実行委員長の濱島君と実行委員会のメンバー、他大学学生との調整に尽力してくれた清野君、荒井君、ポスターをデザインしてくれた小林さんをはじめとする学生さんに御礼申し上げます。

新潟大学は事務主管に加えて、硬式庭球、バドミントン、バスケットボール、サッカー、ゴルフ、剣道、水泳で競技部門主幹も担当します。それぞれの部の顧問の先生には部門会長をお引き受けただいております。部員である学生さんも開催に向け尽力しております。どうぞ皆様のあたたかいご支援、そしてご声援をお願いいたします。

\*第51回大会からオールデンタルの開催母体である全日本歯科学生体育連盟にホームページができました (<https://alldental-ac.net/>)。今後各競技部門の開催期間や会場、参加校などの情報がアップロードされると思います。会場近くの皆さんは応援に駆けつけていただけると嬉しく思います。

追記) 新型コロナウイルス感染拡大の影響により、3月開催予定であった競技部門は全て中止となってしまいました。早い収束を心より願っております。



# 第52回全日本歯科学生総合体育大会に向けて

歯学科3年 濱島 北斗

はじめまして。このたび第52回全日本歯科学生総合体育大会（オールデンタル）の実行委員長を僭越ながら務めさせていただくことになりました歯学科3年の濱島北斗です。今回のデンタルは東京五輪の開催と重なり、開催時期をずらして行う競技もあると聞いています。私自身はデンタルの競技種目にはない軟式野球部に所属しているため例年がどういったものか分かりませんが、準備を含め例年の大会とは異なった雰囲気になるのではないのでしょうか。

デンタルの開催にあたって主管校として正評議員の片木君をはじめ、先生方、学務の方々のサポートを頂きながら大会に向けて準備が整いつつあります。各部活においても準備に追われて大変であると思いますが、そうした経験を仲間と乗り

越えた末には6年間で一番思い出に残る大会になると思います。

選手としても各部活で大会に向け、日々学業と平行しながら練習に励んでいることと思います。試合において相手はライバルですが終わればノーサイド。同じ歯科の道を志す仲間です。この大会を通して将来の歯科界を担う仲間とスポーツを通して交流を深められるのではないのでしょうか。正々堂々と真っ白な歯のようなフェアプレーで昨年のラグビーW杯にも負けず、東京五輪に弾みをつけるような熱い戦いを期待しています。ただ、手を使う職業であるのでくれぐれもケガには気を付けてください。選手の皆様のご活躍期待しております。





# 第52回オールデンタルへ向けて

歯学科3年 片木源太

この度第52回デンタル評議委員長を務めることとなりました片木です。今年は新潟大学がデンタル全体として多くの部門で主幹を担っております。自分たちの在学中に主幹校として番が回ってくるということで、同学年である各部の部長たちはいつもより緊張した面持ちで責務にあたっているように思われます。なんとといっても2020年はオリンピックイヤー、特に東京周辺ではスポーツ施設、宿泊施設、観光会社等々、大忙しの模様で部活によっては開催する場所を確保することすら難しくいまだ未定のところも見受けられます。しかしながらデンタルは年に一度自分たちの積み上げてきたものを存分に振るう場ですので多くの部活が開催できることを願っております。

私たちの学年は部活ではすでに幹部学年にあたり、部によっては今回が最後のデンタルとなる人も多いはず。いままで当たり前のように学業の隣にあった部活動という大きな存在がもうすぐ一区切りとなります。いままでの自分を十二分に

発揮できるよう準備を進めてくれたらと思います。

今年はオリンピックということで日本中が熱くなっておりますが、その熱に負けないようにオールデンタルも盛り上げていきたいと思っております。イランとアメリカの問題が少し気がかりではありますがオールデンタルとオリンピックが無事盛大に開催されますことを願ひまして私からのあいさつといたします。1年間よろしくお祈いします。



# 第52回全日本歯科学生総合体育大会にむけて

バスケットボール部 歯学科4年 荒井裕貴

こんにちは、歯学部バスケットボール部です。歯学部バスケ部は、男子部11名、女子部16名の計27名で活動しています。

例年8月の頭に行われる全日本歯科学生総合体育大会（通称：デンタル）ですが、来年度は2020年東京オリンピックと重なるため、前倒して2020年の3月に行うことにしました。なぜこのような言い方なのかというと、第52回デンタルの主幹を務めているのは新潟大学だからです。全国に30近くの歯科大学がある中、まさか自分が部長の代で主幹を務めることになるとは思っていませんでしたし、よりによってその1回が東京オリンピックの年に当たるなんてと頭を抱えながら大会に向けて動き始めてもう1年以上経とうとしています。このような不運に見舞われた私でしたが、そ

れでも主幹の仕事を何とかやっていたのは最高の仲間達に恵まれたからだとつくづく思います。新潟大学バスケ部一丸となってこの大仕事を全うしたいと思います。

ここまで主幹の話しかしていませんが、もちろん練習も頑張っています。男子部、女子部とも前大会の成績を越えるためにも、ますます追いこんでいるところです。

最後になりますが、バスケ部が活動できているのは、外部から練習に来てくれる仲間、忙しい合間をぬって来てくれるOBの方、いつも支援して下さる先生方や卒業生の方々のおかげであり、本当に感謝の気持ちが尽きません。そんな方々の期待に部員一同全力のプレーで応えていきたいと思っています。



# 第52回全日本歯科学生総合体育大会に向けて

硬式庭球部門 鈴木 気 敏

“2020年の全日本歯科総合体育大会の開催だが、夏はオリンピックと重なるので難しいかもしれない。具体的には春頃の開催が望ましい。”その情報を私達が聞いたのは去年の4月ごろであった。それまでは夏開催ということで予定を組んで準備していたが、急に開催時期が半年ほど足りなくなってしまった。

昨年秋、前年度の福岡歯科大学からの引き継ぎがほぼ完了し、本格的に主管校としての運営が始まった。まずは予算の作成からであった本来ならば例年2月ごろ行っていたそうだが、今年は開催が早まったため、10月中にこれを行わなければならなくなった。しかし当然自分達は主管校という立場は初めてのことなので、わからないことだらけだったが、前年度主管の福岡歯科大学のサポートもあり、急な予算作成にもなんとか対応できた。

12月ごろからは選手登録や参加費用などの全大学への連絡も本格的になり、いよいよ忙しくなった。当然自分達の部活の運営や、学校の実習もあるので、かなり大変だったが幸い自分達の代は上手く仕事を分担することができたので、現時点で

もスムーズに準備を進められていると思う。また、1月になり審判団である千葉県テニス協会との連絡も本格化してきた。基本的にルールの改正がないので、大幅なルール改正のあった前回大会と比べると仕事量は減っているが、それでも例年と同じく、連絡を取り合わなくてはならないので、多忙なのは同じである。

大会開催まで残り2ヶ月となった。運営の方も追い込みの時期となって、これからより多忙になると思われるが、部員一丸となって精一杯主管校としての役割を果たしたいと思う。



# 第52回全日本歯科学生総合体育大会に向けて バドミントン部門

歯学部バドミントン部主将 小林 雅

この度、全日本歯科学生総合体育大会の部門主管を務めることとなり、大変光栄に思います。今大会は、例年と異なり、東京オリンピックの影響のために夏季ではなく、春季の開催となります。準備期間が、前回大会から半年ほどしかなく、また前回大会までと異なる点も多々あり、戸惑いながらではありますが、少しずつ準備を進めております。

全日本歯科学生総合体育大会、通称デンタルは、全国の大学の部員がこの大会で好成績を収めることを目標に日々練習に励む、大きな意味を持つ大会です。そのような重要な大会を運営することに、大きな責任を感じ、不安に思う部分も多く

あります。しかし、私を含めこのデンタルを楽しみにしている人が多くいること、大会運営のために協力して下さる方がたくさんいることを支えに、無事開催できるよう努力していきたいと思っております。

また、今大会は運営という部分に目が向きがちではありますが、参加選手の一人として、また私たち3年生にとってはこれが最後のデンタルになるため、競技のほうも自己最高の結果を残したいと思っております。部員全員が満足いく結果を残せるように、日々の練習も部員一同切磋琢磨し、努力していきたいと思っております。



第51回全日本歯科学生総合体育大会にて

# 第52回全国歯科学生総合体育大会に向けて

歯学科3年 馬場 水彩妃

私は、新潟大学に入学してから剣道を始め、3年の月日が経とうとしている。これまで全く縁がなかった剣道を大学から始めた。道着、袴、防具を揃え、新鮮な気持ちで始めたが、先輩、同期は経験者ばかりでついていけず、辛い時期もあった。

しかし、今となっては入部してよかったと思っている。先輩方、同期に支えられ、後輩からも刺激をもらい、とても充実した3年間だった。その中でも、デンタルで得た自信は私にとって一番大きなものだった。2年生のデンタルの個人戦で初めて勝利してからは、部活に対する考え方がかなり変わった。もっと上手になりたい、たくさんの技に挑戦したいと思うようにもなった。前回のデンタルでは、個人戦では負けてしまったが、女子

団体戦では東北大学と合同チームを組み、3位になることが出来た。一緒に戦った東北大学の皆さんや、デンタルを通して仲良くなった他大学の友人からはとてもいい刺激をもらった。

そして今回、デンタルの主幹を務めることとなった。自分自身が大会を運営した経験がないうえ、オリンピックによりいつもとは違う日程・形式となるため、不安しかないというのが正直なところである。一方で、この任務を全うすることが自分にとって貴重な経験になるとも思っている。実行委員長として責任をもち、顧問の先生をはじめとしたOBの先生方、同ブロック校の協力を賜りつつ、参加者にとって良い大会となるよう、精一杯頑張りたい。



# デンタルのポスターを作成して

歯学部歯学科3年生 小林 優 佳

新潟から遠く離れた全国の歯科大学の方々に、新潟県の良さを知ってもらいたいという気持ちで、このポスターを描きました。デザインを作る過程で、新潟の魅力やアピールポイントについて考えたり調べたりしていくうちに、新潟県の素晴らしさを再認識でき、良かったと感じています。

デンタルに参加する「選手」、日本三大花火の一つである「長岡花火」、新潟市のシンボルと言える国指定重要文化財「萬代橋」、特別天然記念物の「朱鷺」、佐渡島に伝わる「佐渡おけさ」、そしてお米、お酒、海鮮などの「食べ物」を描きました。全国から新潟に来る歯学部の方々に新潟の特産を知ってもらうきっかけになればと思います。また、自分の生まれ育った新潟という地を見つめ直す、とても良い機会になったと感じています。

そして、デンタルに参加する選手の皆さんを応援する気持ちを込めて描きました。選手の皆さんのご健闘をお祈りいたします。

私は医歯学合同の美術部に所属しているため、選手としてデンタルには参加しませんが、ポスターを製作するという形で、新潟大学が主幹校と

なるデンタルに関わることができ、嬉しく思います。



## デンタルを終えて

卓球部 関山 裕

この度、文章の方を書かせていただきます、歯学科4年の関山 裕を申します。よろしくお願い致します。

卓球部は、今年のデンタルにおいて、総合では準優勝、女子団体では優勝、男子団体ではベスト8という結果を残すことができました。振り返ってみて、一人一人が力を出し切れた大会だったと思います。今回は、私が部長を務めさせていただき、感じたことを書かせていただこうと思います。

まず初めに、温かいご支援をしてくださるOB・OGの先生方へ、感謝を申し上げます。私の部長としての目標は、「デンタル総合優勝」でした。目標達成のために練習メニューの工夫や、自主練日を設けて練習回数を増やしたり、対外試合を増やしたり、たまにデンタルに向けての話し合いを、お酒を飲みながら話したりしました。デンタルが近づいてくるにつれて、練習の成果が現れないときや、本当にこの練習が自分や部員のためになっているのか不安に思うことが多くありました。恐らく、この悩みは部員全員に共通していたと思います。しかし、そんな中でも練習を一緒に続けてくれた部員たちに本当に感謝しています。結果として優勝は出来ませんでした。練習

の成果を発揮することは出来たと思うので悔いはないです。

目標に向かって努力するというのは、卓球だけでなく、何を行うにしても重要なことだと思います。これらは、部活に真剣に取り組み、一緒に努力してくれた部員がいたからこそ、得られた何にも変え難いことだと思います。このような素晴らしい部活で部長を務めることが出来て、卓球をすることが出来て、大変嬉しく思います。同期や、先輩、後輩、そしてご卒業されてからも部活の応援をしてくださっているOB、OGの方々に感謝申し上げます。

最後まで読んでくださりありがとうございました。



## 第51回歯学体報告 弓道部（部門準優勝）

### 弓道部 第49代主将 高橋 竜 平

新潟大学歯学部弓道部第49代主将の高橋です。第51回歯学体、全国歯学部弓道大会での結果を報告させていただきます。

わが校は、男子団体3位、女子団体準優勝、総合準優勝を勝ち取ることができました。今回このような結果を出せたことは、OB・OGをはじめ、顧問の山崎教授、そして応援くださった全ての方々のご支援とご協力の賜物であります。心から感謝を申し上げたいと思います。

新潟大学歯学部弓道部では、現役部員、引退部員を含め計26人が毎週火曜・木曜・水曜日に新潟大学旭町キャンパス内の弓道場で活動しています。今年度は新入部員が5人加わり日々練習に励んでいます。今回の全国歯学部弓道大会に向けて、強化練習を行ったり、他大学との交流戦や通信対戦を行ったりすることで、実践的な練習の機会を持つことで研鑽を積んできました。第52回全

国歯学部弓道大会に向けても、今回の歯学体で学んだことや反省点を見直し、よりよい成績が出せるよう部員一同精進していきたいと思えます。

また、2019年をもって新潟大学、旭町キャンパス内の弓道場が建て直しとなり、新しく生まれ変わりました。OB・OGをはじめ、多くの新潟大学関係者の方々によるご支援のおかげにより、新道場の建設に漕ぎ着けることができました。新潟大学旭町弓道部一同心より感謝を申し上げます。新しい道場は今まで以上に広く、素晴らしい環境で弓を引くことができます。是非、足を運んでみてください。

最後になりますが、重ねて新潟大学歯学部弓道部へのご支援とご協力を下さった全ての方に感謝を申し上げたいと思えます。ありがとうございました。





## 医歯学祭を終えて

歯学部歯学科3年 小川 祐 未

私は第9回医歯学祭実行委員歯学部委員長を務めさせていただきました、歯学科3年の小川祐未です。今年も先輩方が代々受け継いできた医歯学祭を無事に終えることができ、嬉しく思います。また、医歯学祭の実施に向けてお力添えいただきました地域の方々、先生方、学務の方々、先輩、同期、後輩の皆様にご心より感謝申し上げます。私一人では何もできなかったと思うと、改めて支えていただいた方々には感謝の気持ちで胸がいっぱいです。ここでは医歯学祭を通して自身が感じたこと、学んだことなどをまとめさせていただきます。

今年の医歯学祭のテーマは「医歯『楽』祭（いしがくさい）」でした。このテーマの通りに、様々な人が楽しめる『楽』しい企画が盛りだくさんとなりました。新潟大学旭町キャンパスでは普段、医学部に医学科と保健学科、歯学部には歯学科と口腔生命福祉学科というそれぞれの学科で別々に学習しています。しかし、医歯学祭では学部学科の垣根を超えて交流し、自身の見える世界が広がると同時にものの見方も変化しました。同じ物事に直面した場合でも捉え方は人それぞれ異なり、自分と異なる意見や異なる目線を持つ他者と共生していくためにはより多くの引き出しを用意しておく必要があります。この医歯学祭で私が特に自分の引き出しを増やせたと思うのは、保健学科の専攻ごとの紹介ブースと文科系の部活動のブースです。保健学科の中に3つの専攻があることは存じ上げていましたが、それぞれの専攻の中で何をしているのか、どのように活躍するのかを具体的に知ることで、お互いの仕事を尊敬する気持ちを再確認したり、卒後病院に出た後から診断・治療する際、協力する上で必要な理解を深めたりすることができました。

また、私が医歯学祭の魅力の一つ挙げるならば、たくさんのイベントが散りばめられていることを挙げます。「チーム医療」という言葉を皆さ

んも一度は耳にしたことがあるかと思いますが、医療従事者を志す“同志”が集った旭町キャンパスならではのチームの絆を、部活対抗のステージ企画などで実感していただけたのではないかと思います。ほかに、国際音楽エンターテイメント専門学校の方々にご協力いただいた学内ラジオ放送や、観客の皆様も一緒に楽しめる参加型のビンゴ大会など、ここでは紹介しきれない魅力的なものばかりとなりました。おそらく来年も楽しい企画が盛りだくさんとなると思いますので、今まで医歯学祭にいらしたことがない方や出店の仕事のみでイベントに参加したことがない方はぜひ参加してみることをお勧めいたします。

今回私は友人からの依頼により思いがけず実行委員長になり、不慣れな点が多くご迷惑おかけいたしましたことでもありました。しかし、その度助けてくれた方々がいらっしゃったため無事に終えることができ、感謝の気持ちでいっぱいです。最後になりましたが、第9回医歯学祭の開催にあたりましてご理解とご支援いただきました地域の皆様、大学関係者の皆様、協賛病院・企業の皆様、そして企画・運営のため早くから準備して下さった実行委員、スタッフの皆様へ、厚く御礼申し上げます。今年の医歯学祭が皆様にとって良き思い出として心に残りますよう、また、今後も無事に医歯学祭を実施できますよう心から願っております。



# ポリクリを終えて

## ポリクリを終えて

歯学科5年 強 瀬 真 衣

「ついにポリクリが始まる。」

いつもなら和やかな教室が少しピリッとした雰囲気包まれているのを感じたポリクリ初日。私は今の自分が友人とはいえ、実際に“人”の口腔内を見て、触って、処置をすることなんてできるのかと不安を感じていました。

しかしいざ実習が始まってしまうと時間はあっという間に過ぎていき、当初の不安はいつの間にか消え、「臨床実習の前に今のポリクリで少しでも多くのことを学ばなければ！」と思うようになりました。

新潟大学歯学部では5年生の10月から実際に病院で患者さんの治療をさせていただく臨床実習があります。臨床実習になれば分からないから、不安だからといってすぐに横の先生や友人に助けを求めることはできなくなります。予めしっかりと診療を想定した準備をした上で患者さん状態を把握して判断することを求められるのです。

つまりポリクリはただの実習の一つだけではなくそのための訓練の場でもあるのです。

具体的な実習の内容としては相互に口腔内清掃をしたり、麻酔をしたりします。

私たちは班員同士で「その角度で器具を当てれば痛くない」「そうされると人によって不快に感じるかも」などと患者さん役になった時に感じたことを共有するようにしていました。このことは今の診療でも生きていると感じます。自分で体験しないと分からないこと、他人に言われて初めて分かること。技術や知識だけでなく、そういうこともこのポリクリの実習から学べたことで臨床実習への不安もほんの僅かですが減ったように思います。今はまだ臨床実習の真っ最中で、ご指導して下さる先生方や未熟な私たちに協力して下さる患者さん、切磋琢磨できる友人、両親など沢山の方々に支えられながら学ぶ日々ですが、卒業してしっかりと恩返しができるように努力していきたいと思います。



## ポリクリを終えて

歯学科5年 柳川 万由子

臨床実習が始まり早くも4ヶ月ほどが経ちました。緊張や不安を感じたり、自分自身の未熟さを痛感したりする日々が続いていますが、その中で、ポリクリで学んだことを実践する場面が何度もありました。

新潟大学では5年生の10月から1年間、大学病院にて臨床実習が行われます。ポリクリは、各診療科を回り、臨床実習に必要な知識・技能・態度を習得するための実習です。

ポリクリが4年生までの実習と大きく異なる点は学生相互実習であると思います。4年生までは模型を相手にしていましたが、ポリクリでは同期の学生を相手にして実習を行います。模型とは異なり、口腔内には個人差がありますし、当然痛みも感じます。そのため、実習に対する緊張感はより一層増しました。

相互実習では、医療面接や浸潤麻酔、採血、口内法X線撮影、印象採得など様々なことを行いました。そのなかでも最も印象に残っていることは浸潤麻酔の相互実習です。麻酔を打つのは初めてのことであり、何度も実習書を読んで予習をし、イメージトレーニングをしました。しかし実習当日はとても緊張し、注射を持つ手が震えていたのを覚えています。先生方が丁寧に教えてくださったことで、なんとか実習を終えることができました。また、同期の学生同士でアドバイスをし合ったり、励まし合ったりしたことも実習を進めるに

あたって心の支えになっていたと感じます。

ポリクリの実習で行ったことは、臨床現場で今後私たちが実際に行うことばかりです。ポリクリでより多くの知識・技能を身に付けておくことは、OSCEだけでなく、臨床現場に出るにあたって大切なことであると感じています。これからポリクリが始まる後輩の皆さんには、ポリクリを通して多くのことを学んでOSCEや臨床実習に活かしてもらいたいと思います。

ポリクリ、CBT、OSCEを終え、臨床実習が始まって4ヶ月ほど経ちますが、まだまだ経験が乏しく、知識・技能も不十分であると痛感しています。自分自身がもっと成長できるようにこれからも努力し続けたいと思います。



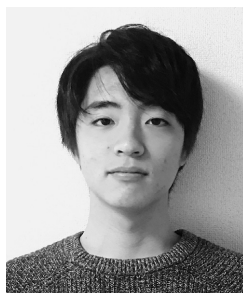
---

# 早期臨床実習を終えて

---

## 早期臨床実習を終えて

歯学科1年 高津 彰史



早いもので、もうすぐ最初の1年間が終わろうとしています。入学当初は、行先6年間の期待や不安と、新しい環境とこれまでのそれとの温度差で、これからの大学生活の道程の長さを想定していたものですが、今は良き友人に囲まれ、とても充実した日々を送れていると実感しています。この1年間で早いと感じることができたのも、日々の生活で充足感を得ることができたからだと思います。

さて、今ほど充足感とお話をさせていただきましたが、大学に入学して最初にそれをはっきりと感じることができたのが、早期臨床実習だったように思います。入学して間もない頃の、周りのみんなについていくのが精一杯だった私達の、生活の中心のひとつに確かにそれが存在していて、実習期間中の毎週金曜日は私にとって待ち遠しいものでした。数ヶ月前までは受験勉強に追われていたのに、今では、何も出来ないながらも白衣を着て病院の中でいろいろなことを学んでいるということが何よりも嬉しくて、自分たちの将来像を垣

間見ることが出来たような気がして、またそれが自分自身の心臓に早鐘を打たせるような、そんな貴重な時間を経験させていただきました。

実習の中でも、私の中で特に印象に残っているのが、患者付き添い実習です。その理由は、この実習が、これまで学んだことの総括をしてくれたように思えたからです。私の所属していた班は、患者役実習、各科見学、付き添い実習の順で実習が進行していきました。最初の患者役実習では、先輩方から治療をしてもらいながら、基本的な歯の磨き方や治療内容などを学びました。その後の各科見学では、各科の先生方の、患者さんに対する治療の別や意識していらっしゃることなどについてのお話を伺いました。そして最後の付き添い実習で、実際に来院された患者さんに付き添いの許可を頂いて見学をさせて頂いたのですが、この時私は、最初の患者役実習の時とは異なる印象を受けました。実習を通して学んだ、先生方から患者さんへのアプローチや思い遣りなどを現場で実際に見ることができたこの経験は、私達の今後への糧になると思っています。

最後に、私達のために貴重なお時間を割き、このような機会を与えてくださった先生方に、心から感謝申し上げます。今後の5年間で、歯科医師になるための勉強は勿論、人としても成長していけるよう頑張ります。

## 目に見えるもの全てが新鮮かつ学び ～早期臨床実習を終えて～

口腔生命福祉学科1年 藤田彩夏

入学前、新潟大学の歯学部には早期臨床実習があると知って、とても興味を引かれました。実際に新潟大学の歯学部を選んだ理由の一つに早期臨床実習があります。入学してすぐに実習が始まる学校は珍しく、早い段階から医療現場に触れることができる魅力的なカリキュラムだと思いました。そのため、医療の現場に立てるという大きな期待を抱いていました。実習前に歯学部口腔生命福祉学科のユニフォームを初めて着たときのこれから頑張ろうという意気込みや、期待で胸をいっぱいにしたことは今でも忘れられません。その反面、実際に歯科医師や歯科衛生士、患者さんと触れ合うということに緊張感を持ちました。新潟大学医歯学総合病院のことや歯に関する知識もない、無知な状態で患者さんと接することはとても怖かったです。しかし、見たもの聞いたものが全て新鮮で学ぶことが多く、あっという間に早期臨床実習の過程が終わりました。また、今までは患者さんという立場でしか病院内に入ったことがありませんでしたが、責任感や患者さんの気持ちなど、医療従事者側だからこそ感じられることを経験できました。

「患者付き添い実習」で特に印象に残っていることは、患者さんに「いい笑顔だね。今日はありがとう。」と言われたことです。そのときは嬉しくて、実習生として頑張る糧になりました。医療従事者にとってのやりがいの一部を感じることが

できました。また、口腔内を健康に保つことは、人生を楽しく過ごすこと、QOLの向上にも繋がると学びました。

「患者役実習」では、歯学科の6年生の方に歯磨き指導や、歯垢の染め出しなどをしてもらいました。回数を重ねるごとに歯垢の付着度が低下するのを体験して、歯磨きの大事さや楽しさを再確認しました。私が歯科衛生士になったときは歯磨きを面倒だと感じている方に、この楽しさを伝えたいと思いました。

早期臨床実習を通して学んだことはこれからの実習や医療現場に就いたときに役立つと思います。今まで自分が患者として診察・治療を受けた時の気持ちを忘れず、患者さんの痛みを理解できる医療従事者となるためにこれからも勉強に励みます。



## 早期臨床実習を終えて

歯学科3年 丸山優依

3年生の前期に、早期臨床実習Ⅱが行われました。1年生の時の早期臨床実習Ⅰと同じように、班に分かれて臨床の現場に行き各診療科を見学します。ただ、早期臨床実習Ⅰよりも詳しい説明をされることが多く、見学に加えて、実際に器具を使って少し実習することもありました。各診療科の見学に行かない週は基礎科目の講義があり、歯科医療に必要な知識の多様性について理解できる貴重な機会となりました。また、昨年1年間で基礎科目について学び、少し知識が増えてからの早期臨床実習は、やはり1年生の時とは感じ方が変わったように思います。

どの診療科の見学でもそれぞれ印象に残る点がありました。例えば予防歯科の見学では、班員が交代でユニットに座り、お互いの口腔内を観察するという実習を行いました。それまで患者として治療を受けたことはありましたが、自分が他者の口腔内を見て判断する側になるのは初めてでし

た。口腔内は想像より暗く、観察するだけでも器具の使用法や患者と自分の体勢、光の当て方など様々なことを意識しなければいけません。治療時にはさらに多くのことを考える必要があり、歯科医師は多様な能力が求められる職業だと実感しました。また、歯の診療科ではレジン充填を行う治療の見学をしました。材料の特性や作用機序、作業工程などを学んだことで、1年生の時よりも治療時の作業の意味を考えながら見学ができたように思います。加えて、治療時の歯科医師の患者さんへの接し方にも意識を向けて見ることができました。他の診療科でも、色々な治療を見学し学んだ知識を確認しましたが、その一方で理解不足な点も多くあると感じました。

早期臨床実習Ⅱで歯科医師に求められる技術や知識、姿勢を学び、これから身につける必要のあるものの多さを再認識しました。現在は3年生の後期に入り、より専門的な科目や臨床に関わる実習が始まっています。早期臨床実習Ⅱで感じたことを意識し少しでも多くの知識や技術を習得して、より良い歯科医師になれるよう励んでいきたいと思います。



## 早期臨床実習を終えて

口腔生命福祉学科2年 白井 唯

こんにちは。口腔生命福祉学科2年の白井唯です。今回は早期臨床実習を終えてというテーマのもとに話をさせていただきます。

早期臨床実習ⅡBが始まったのは、私たちが2年生になったばかりの時でした。五十嵐キャンパスでの教養科目を終えたばかりで、医療の知識などまだまだ浅い私たちにとってこの早期臨床実習はとても興味深いものでした。

早期臨床実習では、福祉施設や病院歯科などの見学、高齢者疑似体験、歯科医院での業務を想定した患者待遇や電話対応の仕方、バイタルサインの取り方など、将来医療の現場に出た際に必要な技術や精神を幅広く学びました。これらの早期臨床実習を終えて、私はこれまでと違った価値観を持つようになりました。

中でも特に印象に残っているものの一つが、高齢者疑似体験実習です。高齢になると腕や足の感覚が重くなり、動かしにくくなる、難聴や視力の低下が起きるなど、不自由な点が多くなります。現在の私たちは身体に不自由なく生活を送ること

が来ていますが、実際に手足におもりをつけたり、視野を悪くする眼鏡をかけたり、耳栓をするなどして高齢者の身になることで、高齢の方の気持ちを知ることができました。この実習を通して、視覚や聴覚が制限されることによる不安感や孤独感、身体を思い通りに動かすことができない苦しさなどを身をもって体験し、歯科に来院された方にとどまらず、日常のあらゆる場面で高齢の方の身になり、配慮していくことが重要だと気づかされました。

また、新潟医療センターでの見学実習も印象に残っています。新潟医療センターには歯科があり、歯科衛生士が病院内の様々な職種の人々と連携をとりながら働いている場であることを学びました。私は以前まで、衛生士は診療所などにおいて歯科医師のアシスタントをする立場であると考えていましたが、実際は衛生士が主体となって働く場面が多くあることを学びました。周術期の患者さんの口腔ケアや栄養管理など、医科とも連携していく必要があることを知り、歯科と医科は切り離して考えてはいけないのだと感じました。

早期臨床実習で学んだことはこれからも心に留めて、これからの実習に臨みたいと思います。



# 素顔拝見



歯科放射線科

小林 太一

2019年4月1日付で歯科放射線科の助教を拝命いたしました小林太一（こばやし たいち）と申します。このたび「素顔拝見」執筆の機会をいただきましたので、この場をお借りして自己紹介をさせていただきます。

出身は新潟県の斜め下、長野県の県庁所在地、善光寺が全国的に有名な長野市です。ほかに有名なものある？と言われたら困りますが。そんな長野市から新潟大学歯学部歯学科に42期生として入学しました。在学中の6年間は軽音楽部LIARSでドラムばかり叩いていたような気がします。当時は歯学部講堂で楽器の演奏が可能(?)でしたので、時間を見つけてはアンプだのドラムセットだのを準備して遊んでいました。遊びすぎたせいかどうかは定かではありませんが、卒業後は東京で1年間のモラトリウムを挟みつつ2度の国家試験を経て卒後研修へとたどり着きました。得難い経験ではありましたがなるべくならば得ないほうが良い経験でもあります。研修修了後は大学院生として顎顔面放射線学分野に入局し、大学院博士課程修了後も所属させていただいております。

趣味というほどではないですが、ここのところ夜に海外ドラマを見るのが日課ようになって

しまいました。以前はBS頼りでしたが、Amazon Primeのおかげで今これを書きながらBGM代わりに流しています。字幕なら格好もつくのですがさすがに日本語吹き替えです。一話完結の警察モノや推理モノがちょうどいい感じで視聴できるので好みます。

さて真面目な話もしなくては。大学院では口腔内超音波検査を中心とした超音波検査をテーマとして研究を行いました。超音波といえばお腹の中の赤ちゃんをみるアレ、の人も多いですが、歯科領域でも活躍しています。深部病変をリアルタイムで描出して診断していくことは難しいですが、それゆえに興味深い領域でもあります。

臨床では超音波に限らず単純撮影、CT、MRI、CBCTと医歯学総合病院ならではの多種多様なモダリティに対する読影を行っています。画像ばかり見ていると思われがちなところもありますが、外来では放射線治療前の口腔ケア・マウスピースの作成にも関わらせていただいています。いずれもまだまだ勉強することは多いですが充実した日々を過ごしています。また新たに教員という立場になりましたので、ちょこっと遠回りした経験を踏まえつつ、やたらと苦手意識を持たれがちな歯科放射線学の楽しさを学生に伝えていければと思っております。

最後に、未熟者ではございますが歯学部の発展に貢献できるように精一杯務めさせていただきますので、今後ともご指導ご鞭撻の程よろしく願います。





歯科麻酔科

金丸 博子

2019年10月1日付で歯科麻酔科の助教を拝命しました金丸博子と申します。よく質問を受けますが「かなまる」ではなく「かねまる」です。

私は新潟市の出身です。兄と弟がおり、世間一般に中間子は自由奔放と言われていましてできっとそうなのでしょう。入局してから今まで何度も「男らしい!」という褒め言葉を頂いておりますので、「男は愛嬌、女は度胸」という母の方針に見事に沿って育ったものと推察されます。

新潟大学歯学部との付き合いは非常に長く、出会いは30年以上前の小学校1年生、競泳大会のプールサイドではしゃぎ、萌出中の左上1を破折したところから小児歯科・矯正科・口腔外科と長きに渡り色々な先生にお世話になりました。入試の面接では今は亡き小児歯科の主治医本人にそのエピソードを語る事になりましたが、無事に合格を頂き、良い同期に恵まれて楽しい学生生活を送りました。歯学部卒業の頃はいわゆる歯科医として活躍する自分を思い描いていたような気がしますが、縁あって歯科麻酔科に入局致しました。入局当時「あの子、麻酔科に入ったの?普通だと思ってたら変わってる子だったんだ?って某先生(他科)が言ってたよ」と同期から言われ、その頃自分は普通だと信じていましたので「どういうこと?麻酔科みんな普通の人たちだよ」と答え

たのですが、今ならきっと「確かに変人の集まりかもしれないね」と答えると思います。入局した頃に麻酔を担当させて頂いた赤ちゃんがもう腸骨移植だなんて、自分も年とったわ、と思っていた日々もすっかり過去の事となってしまいました。が、上級医はもちろんのこと、若手の大学院生、そして患者さんから学ぶ事はまだまだ尽きません。永遠の18歳!と手術前に上司とふざけるのも痛々しいお年頃になりましたが、初心を忘れず日々精進して参りたいと思っております。

私生活では3匹の小鬼たちを追いかけ、朝・夕と時間に追われる毎日です。家の中は帰宅後数分でカオス化し、仲良く遊び始めたと思った数秒後に喧嘩が始まり、私の怒り声が響く中、歩き始めのもう一人が転んで号泣…と本当に賑やか、というか近所迷惑以外の何物でもありません。作品という名前のついた捨てられないゴミが散乱している我が家についため息が出ますが、両家の遺伝子を感じる寝顔が3つ並んでいるのはやはり可愛いものです。小鬼たちとの生活はイレギュラーの連続で飽きませんが、おかげさまで公私ともに全く計画通りに物事が進みません。なかなか一つの事にじっくり取り組む事が難しい現状にもどかしさを感じる場面も多いですが“一つ百点を取る事はもちろん素晴らしいけど、満遍なく合格点を取るスキルも大事だよ”という亡き父の言葉が、今になってしっかりと理解できるような気がします。この素顔拝見の執筆時間もなかなか捻出できず、ついに締切が明日に迫ってしまいました。そんな訳で推敲できず、拙文となりますが、これが素顔という事で許して頂こうと思います。今後ともどうぞよろしく願いいたします。

## Once in a lifetime journey, I have made a perfect decision

Division of dysphagia rehabilitation Sirima Kulvanich



I was born in Phuket, the largest rainforested, mountainous island of Thailand, as known as the “Pearl of the Andaman Sea”, the historic port city where many ethnic groups of people from Asian, Arabian and European countries had passed through for centuries and created the unique cultures that may not find in other cities in Thailand.

I spent my childhood in a small seaside city not far from my hometown for several years before I moved to Bangkok, the capital city of Thailand, to continue studying. In 2016, I received my DDS degree from Thammasat University and continued to work there as one of the faculty staff in the division of gerodontology.

One day, I was discussing about studying abroad with my supervisor when she asked me how do I think about doing a Ph.D. in Japan. By that time, I had very few ideas about studying in Japan, and it was not on my list in the first place, so I hesitated to follow her suggestion. But after I had a chance to join the Sakura Science Program and visit Niigata University, my point of view has changed. I found that there are interesting curriculums that I think I could hardly see in dental schools in other countries, especially dysphagia rehabilitation, so I decided to come, and this is the way

my journey to Japan has begun.

I started to learn some basic Japanese while waiting to apply to Niigata University. After one year and a half, I got accepted into the division of dysphagia rehabilitation, and the acceptance letter came just in perfect timing when I also receive the full scholarship granted by the Thai government.

I remembered that it was on the morning of 24<sup>th</sup> September 2018 that the Shinkansen I took from Tokyo had arrived at Niigata station, and I saw Prof. Inoue Makoto and a new lovely friend were waiting at the platform, just right in front of the Shinkansen door. It was the first impression that wiped away all my worries from the first day of settling in.

I agree on the same things as many foreigners would say, Japan is rich in traditional cultures that blended perfectly into modern life. It was fascinating to see young



Night scenery of my hometown in Phuket

Japanese people wearing traditional clothes walking along the streets at night, people celebrating festivals with traditional dance and music, not to mention the delicate Japanese foods that reflect their own identity.

I also found that Japan has a lot of charming places to get impressed by, especially natural attractions, most of them are breath-taking. Another thing that I love the most while living in Japan is the seasonal change which is not so apparent in Thailand. Not just only because of the beautiful scenery in each season that we can enjoy, but it also gives me the feeling of the new beginning each time it changes.

If I would talk about people, two things that I found very interesting in Japan are the super-politeness of people and the social order. The way that Japanese people know their place in society and work smoothly together toward the goal is admirable.

I can not fully say that my life in Japan has passed smoothly. Indeed, for one who stays 3,000 miles away from home, not familiar with different cultures, had a hard time adapting to Niigata's weather and struggled with communication, homesickness did occur. But with all the support from my professor, instructors, and friends who have helped me going through tough times, at the end of my first year, I can wholeheartedly call Niigata my second home.

I always look back to the day that I decided to come to Japan and pursue my degree here. It was one of the biggest challenges in my life. Until now, I still have a lot

of things to learn here, though it is tough sometimes, but just as Roy T. Bennett once mentioned in his book, *The Light in the Heart*, said that "You never change your life until you step out of your comfort zone; change begins at the end of your comfort zone." I am sure that I have made the perfect decision.



The stunning natural scenery in Nagano prefecture



With the gerodontology team in Thammasat University

# 学会受賞報告

## 最優秀ポスター賞

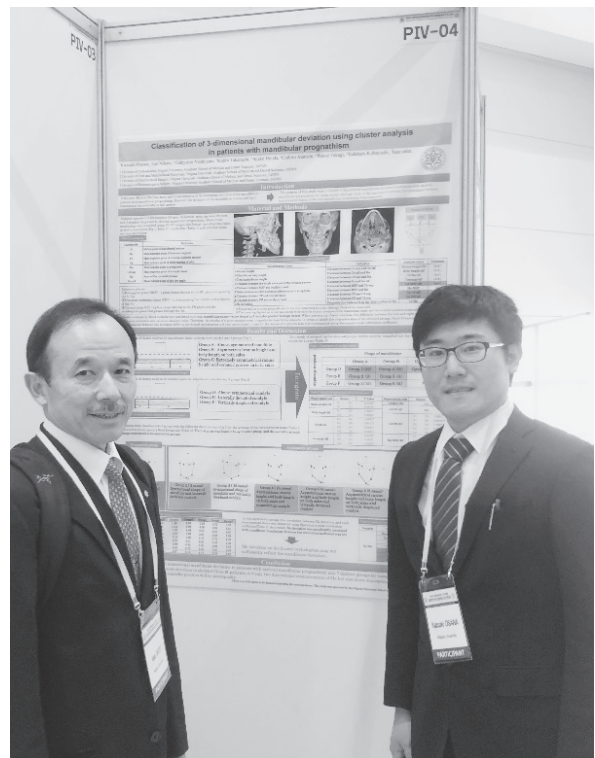
### The 58<sup>th</sup> Congress of the KAMPRS (Korean Association of Maxillofacial Plastic and Reconstructive Surgeons) にて最優秀ポスター賞受賞報告

歯科矯正分野 大澤 知朗

この度、The 58<sup>th</sup> Congress of the KAMPRSにおいて最優秀ポスター賞を受賞致しましたので、ご報告致します。演題名は、「Classification of 3-dimensional mandibular deviation using cluster analysis in patients with mandibular prognathism」です。骨格性下顎前突症患者の顎偏位の指標に、Meの水平偏位量が用いられてきたが、顎偏位様相は多様性に富んでおり、不明な点が多い。そこで、三次元的下顎骨形態計測を行い、下顎骨形態と頭蓋底に対する下顎頭の位置の2つの観点から、クラスター分析を用いて顎偏位の定量化と分類を試みた。また正面セファログラムにおけるMeの水平偏位量と三次元的下顎骨形態との相関についても検討した。結果は、下顎骨形態と頭蓋底に対する下顎頭の位置の2つの観点から対象の分類を行い、顎偏位の特徴が異なる7つのグループに分類できた。またMeの水平偏位量は、下顎骨形態と一部相関を認めるが相関係数が低く、顎偏位の把握には、Meの水平偏位量のみでは不十分であることが分かった。

最後となりますが、ご指導を賜りました齋藤功

教授、高木律男教授、小林正治教授、西山秀昌先生、丹原惇先生、高橋功次朗先生、ご意見を頂きました先生方にこの場をお借りして心よりお礼申し上げます。



## 第78回 日本矯正歯科学会・学術集会 優秀発表賞 受賞報告

歯科矯正学分野 網谷 季莉子

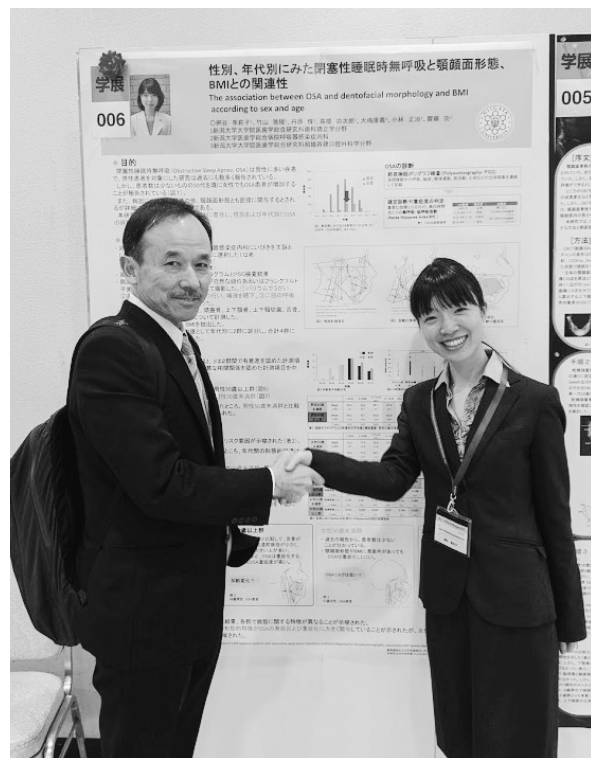
この度、2019年に長崎市で開催された第78回日本矯正歯科学会・学術集会にてポスター発表の優秀賞を受賞しましたのでご報告致します。

演題名は「性別、年代別にみた閉塞性睡眠時無呼吸と顎顔面形態、BMIとの関連性」です。閉塞性睡眠時無呼吸（Obstructive Sleep Apnea: OSA）は男性に多い疾患ですので、男性患者を対象にした研究は過去にも数多く報告されていますが、一定数みられる女性患者についての報告は少なく、未だに不明な点が多いというのが現状です。そこで本研究では、成人のOSA患者男性56名、女性56名を対象として、顎顔面形態、BMIに着目し、性別および年代別にOSAの病態を明らかにすることを試みました。

その結果、性別間、年代間においてOSAの病態に関する特徴が異なることが示され、今後OSAに対する治療については性別や年代による要因の差に配慮した検査方法や治療法を模索する必要があると考えられました。

多くの素晴らしい研究発表の中から選んでいただき大変光栄です。今回の受賞を励みに、臨床・研究に精進したいと思います。

最後になりましたが、今回の受賞にあたり、ご指導いただきました齋藤功教授、竹山雅規先生、口腔再建外科の小林正治教授、呼吸器感染症内科の大嶋康義先生に心から御礼申し上げます。



# 第78回 日本矯正歯科学会・学術大会 優秀発表賞受賞報告

歯科矯正学分野 長崎 司

この度、第78回日本矯正歯科学会・学術大会において、優秀発表賞を受賞致しましたので、ご報告させていただきます。演題名は「舌圧と顎顔面筋群の筋活動同時測定による嚥下時運動解析法の有用性」です。

骨格性下顎前突症患者の嚥下運動は、健常者と比較すると経時的变化に協調性がないため、舌運動と口唇・頬部軟組織の運動を同時測定し、時系列的関係性を検索することで、機能的診断の新たな指標となるのではないかと考え、本研究を立案

しました。結果、骨格性下顎前突症患者では、上下顎骨の形態的不調和により舌の後上方への挙上が困難であること、それを補うために口蓋周縁部の舌圧持続時間および顎顔面筋群の筋活動時間の延長が生じていることが示唆されました。

最後になりましたが、今回の受賞にあたり、ご指導いただきました齋藤功教授、福井忠雄先生、小野高裕教授、堀一浩准教授、ご意見をいただきました歯科矯正学分野の先生方に心から厚く御礼申し上げます。



## 歯科基礎医学会 学会奨励賞受賞報告

微生物感染症学分野 土門 久 哲

令和元年10月に東京で開催された第61回歯科基礎医学会学術大会において、学会奨励賞を受賞しましたのでご報告いたします。

肺炎および誤嚥性肺炎は、わが国の死因のそれぞれ5位と7位を占めており、その死亡率は高齢者ほど高いことが知られています。高齢社会を迎えた今日において、肺炎を予防・治療することは重要な課題であると考え、当研究室では肺炎の基礎的研究を行っています。

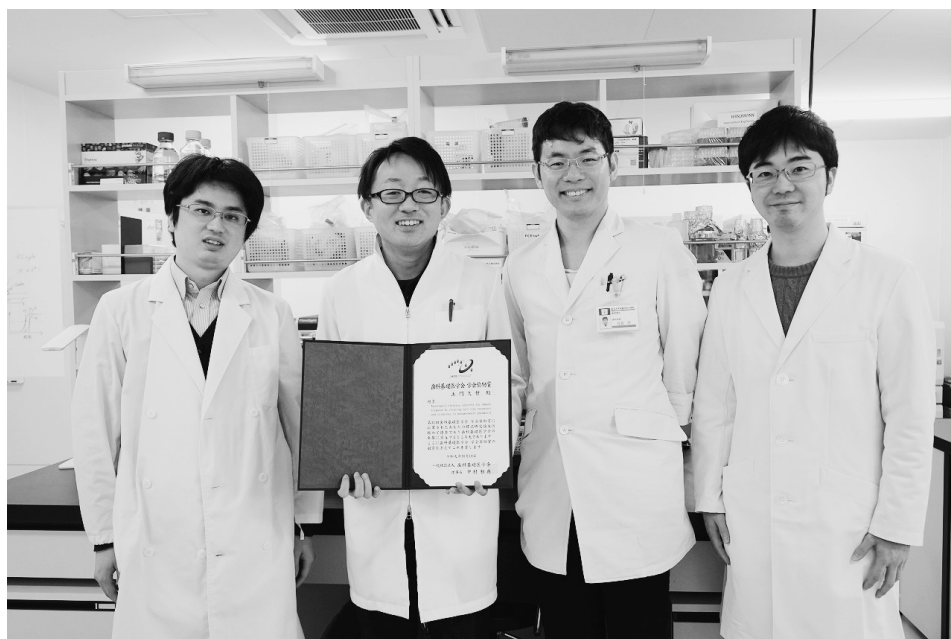
肺炎の主な原因菌である肺炎球菌に感染すると、免疫細胞が肺組織へ大量に浸潤するにも関わらず、肺炎球菌を十分に排除できずに重症化する例が報告されています。受賞論文ではそのメカニズムとして、①肺炎球菌が免疫細胞を破壊し、細胞内部からプロテアーゼを漏出させること、②漏出したプロテアーゼが宿主（肺炎患者）の自然疫

系の受容体を分解し、免疫機能を弱めることを報告しました。

台風19号の影響で学会の開催自体が危ぶまれましたが、受賞講演には多くの先生方に参加いただき、活発なディスカッションをすることができました。また、他分野の先生方とも知り合うことができ、有意義な学会となりました。

最後になりますが、研究指導いただいた寺尾豊教授および研究協力いただいた先生方に心より感謝申し上げます。

受賞論文：Neutrophil Elastase Subverts the Immune Response by Cleaving Toll-Like Receptors and Cytokines in Pneumococcal Pneumonia. *Front Immunol*, 9: 732, 2018.



## 学会賞受賞報告 国際学会研究発表奨励賞

歯科総合診療部 医員 佐藤 拓 実

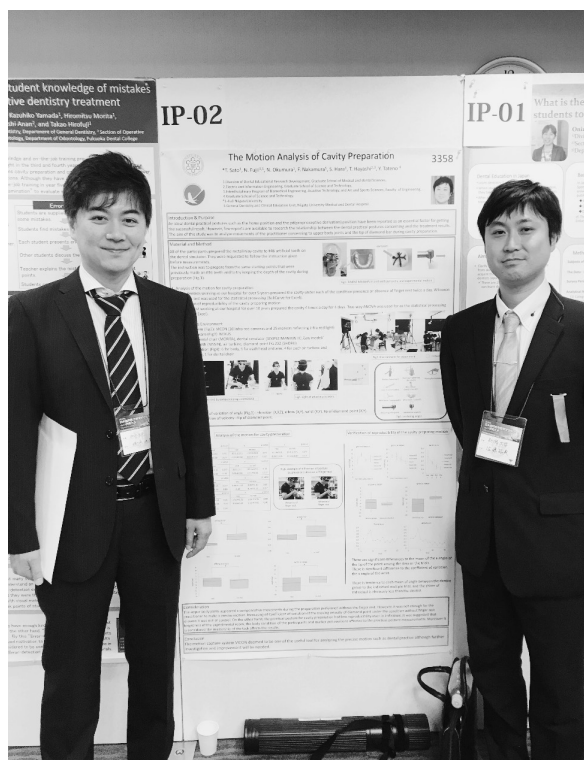
この度、「The Motion Analysis of Cavity Preparation」と題して2018 IADR/PER General Session & Exhibitionにて行ったポスター口演が、第38回日本歯科医学教育学会総会および学術大会にて、第11回国際学会研究発表奨励賞を受賞しましたので報告させていただきます。

窩洞形成は日常歯科臨床において高頻度に行われる手技ですが、適切な形態付与を行うためには高度な技術を必要とします。従来からこのような臨床技術は経験を重ねることにより修得されることが一般的です。またその手技の評価は専らそのアウトカムの評価によって代替的に行われてきました。

本研究では窩洞形成時の頭部、体幹、上肢の動作とエアタービンに備え付けたダイヤモンドポイントの軌道を経時的に計測・解析することで、臨床技術すなわち動作そのものの評価を可能とすることを目的としました。また熟練者と学習者、安定姿勢と不安定姿勢との比較を行うことで、適切なタービンコントロールの要を見極めようと試みました。結果の多くは臨床実感に伴うものでしたが、一方で予想しない結果も認められました。しかしながら、いずれも各群間での相違は極小さなスケールにとどまり、日常臨床で行われるような

肉眼における評価や指導は難しいことが示されました。

このような賞をいただいたことを励みとして、今後も研究活動を続けていきたいと思っております。最後になりますが、ご指導を賜りました藤井規孝教授、並びに工学部工学科 林豊彦教授をはじめ、共同研究者の皆様にご心より御礼申し上げます。





## 第12回日本総合歯科学会学術大会優秀口演賞受賞報告

歯科臨床教育学分野 原 さやか

この度、2019年11月に北海道で開催されました第12回日本総合歯科学会学術大会におきまして、「歯科治療時の力のコントロールの個人差についての検討」の演題にて優秀口演賞を受賞しましたので、ご報告致します。

本演題では、研修開始直後の研修歯科医を対象に、性別や握力の強さの違いが、患者や患歯に加える力のコントロールに及ぼす影響に着目し、検証を行いました。検証の結果、歯科処置の種類によっては、性別や握力の強さが力のコントロールに影響する可能性があることが示唆されました。

術者の身体能力によって、力のコントロールに違いがあることはわかりましたが、現状ではそれを可視化することはできません。したがって、このように文章や言葉だけでは伝わらないような感覚的な領域に関する教育では、どうしても教育する側の主観的な評価に頼らざるを得ません。当分野ではこのような現状に鑑み、客観的な評価方法の検討や、その評価に基づいた個人差に合わせた教育方法の開発を目指して研究を行っています。限られた時間を過ごす臨床実習や臨床研修の中で、少しでも効率的に多くのことを習得できるようなシステムの開発を目指していくことができ

ばと思っております。

最後になりますが、日々多大なるご指導をいただいております藤井規孝教授ならびに歯科臨床教育学分野・歯科総合診療部の先生方、そして研究に協力いただいた研修歯科医の先生にこの場をお借りして深く感謝申し上げます。



## 受賞報告

### 総合臨床研修センター 研修歯科医 金岡 沙季

この度、2019年11月に開催されました第12回日本総合歯科学会において、最優秀若手ポスター賞を受賞しましたので、ご報告致します。

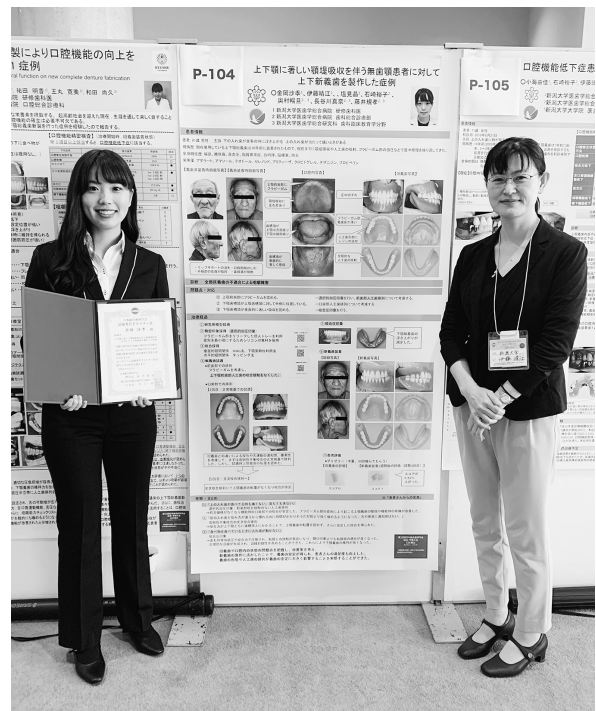
演題名は『上下顎に著しい顎堤吸収を伴う無歯顎患者に対して上下新義歯を製作した症例』で、ポスター発表をさせて頂きました。下顎義歯の浮き上がりを主訴とする無歯顎患者に対して、問題点とその対応を検討しました。通法通りの手順に加え、ピエゾグラフィを用いて人工歯の排列位置や義歯研磨面形態を決定し、交叉咬合排列として蝸義歯試適を行った後、咬合圧印象を採得しました。完成した義歯は調整後、良好に経過しています。本症例を通し義歯床の形態や人工歯の排列が義歯の安定に大きく影響する事を実感できたことは研修医としてとても良い経験となりました。

初めての学会発表ということもあり、当日はズラリと並んだポスターを前にすると、緊張感が一層高まりましたが、沢山の方から頂いた激励のお言葉を思い出し、さらに、医局の先生方が見守ってくださる中でしたので安心して発表をすることができました。

このような大変貴重な機会を与えていただき、また、ご多忙の中ご指導下さいました藤井規孝

教授、伊藤晴江先生をはじめとする歯科総合診療部の先生方ならびにご支援いただきました全ての先生方に心よりお礼申し上げます。

今回の経験を今後も活かしていけるよう、日々精進して参りますので、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。



## 第12回日本総合歯科学会学術大会 優秀ポスター賞受賞報告

総合臨床研修センター 研修歯科医 小海 由佳

この度は、2019年11月に北海道で開催されました第12回日本総合歯科学会学術大会若手ポスター賞におきまして優秀ポスター賞を受賞しましたのでご報告致します。

演題名は「口腔機能低下症患者に対する治療計画立案の経験」です。

平成30年度の診療報酬改定後、当院では今年度より該当初診患者さんに対して口腔機能検査室の運用が開始されました。本症例の患者さんは検査を希望され実施したところ、7項目中、口腔乾燥、咬合力低下、舌圧低下の3項目が該当し口腔機能低下症と診断がつかしました。それぞれの原因として全身的既往の糖尿病、主訴である義歯、加齢変化を挙げ、改善策として治療状況やHbA1cについて聴取による全身疾患の把握、義歯の新製、そして、検査室の口腔リハビリテーション科の先生にご教授いただき口腔体操や唾液腺マッサージの指導による口腔機能管理を行いました。

本症例では初診時に検査を実施し、診断がついたことで治療計画に口腔機能管理を盛り込むことが出来ました。これらの経験から、検査の重要性や義歯製作のみに主眼を置くのではなく、義歯の不具合の背景について、総合的に考察するという広い知見、そして口腔機能低下症患者への対応方法について学ぶことができました。

また、学会での発表を経験し、歯科から医科へのアプローチやオーラルフレイルに対する理解の重要性をご指摘いただき、私もまだまだ視野が狭

くなりがちであることを痛感致しましたので、今後もより一層研鑽を積みたいと思います。

最後になりましたが藤井規孝教授をはじめ、指導医の石崎裕子先生、歯科総合診療部の先生方、学会参加のためのサポートをしてくださった臨床研修センターの皆様、そして発表までの間協力してくれた同期の研修歯科医の皆さんにこの場を借りて深く御礼申し上げます。誠にありがとうございました。



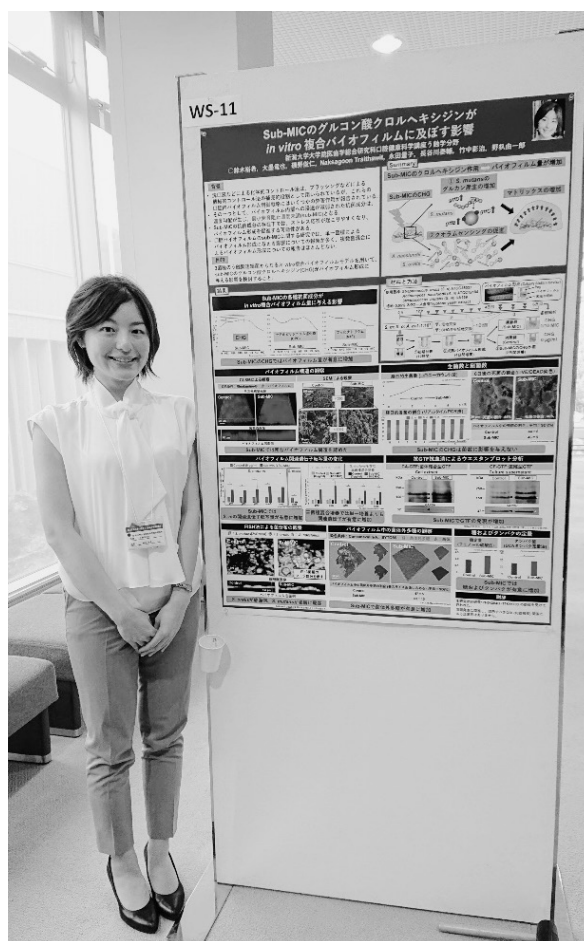
## 第33回 日本バイオフィルム学会学術集会 若手ワークショップ優秀発表賞 受賞報告

う蝕学分野 鈴木 裕 希

この度、2019年7月に久留米にて開催されました第33回日本バイオフィルム学会学術集会におきまして、「Sub-MICのグルコン酸クロルヘキシジンがin vitro複合バイオフィルムに及ぼす影響」と題した発表で優秀発表賞を受賞いたしました。

本研究では、う蝕関連細菌種からなるin vitro複合バイオフィルムモデルを用いて、最小発育阻止濃度未満（sub-MIC）のグルコン酸クロルヘキシジン（CHG）作用時のバイオフィルム形成促進機構について検証しました。その結果、sub-MICのCHGは、*Streptococcus mutans*のバイオフィルム形成関連遺伝子の転写に影響を与えることで、複合バイオフィルム形成を促進させることが示唆されました。今後は、in situ口腔バイオフィルム解析モデルなどを用いた、より口腔環境に近似した条件での検証が必要であると考えます。

最後になりましたが、今回の受賞にあたり、ご指導いただきました野村由一郎教授、竹中彰治先生、大墨竜也先生、ご意見をくださいました先生方に心よりお礼申し上げます。



# 日本歯科保存学会学術大会 専門医優秀症例発表賞 受賞報告

う蝕学分野 大 墨 竜 也

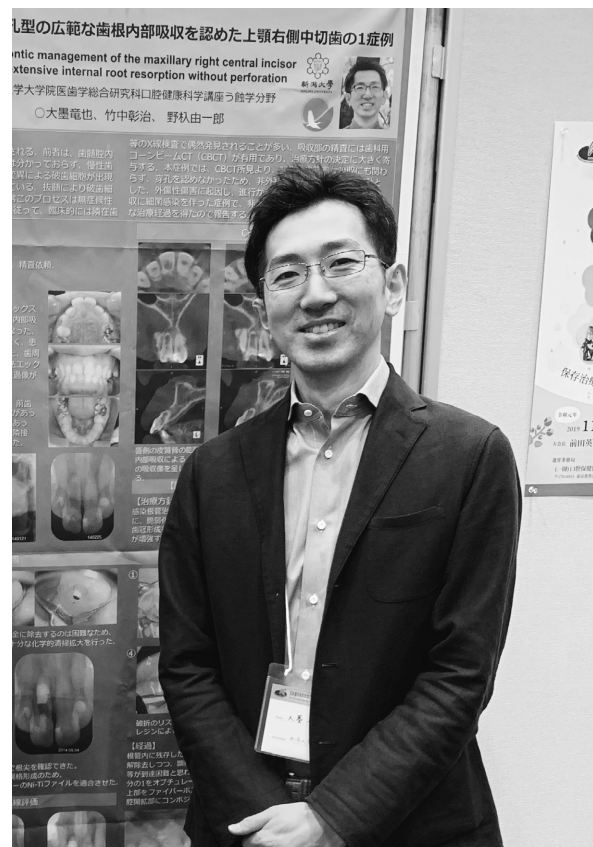
2019年11月に福岡にて開催されました、第151回日本歯科保存学会秋季学術大会におきまして、「非穿孔型の広範な歯根内部吸収を認めた上顎右側中切歯の1症例」と題したポスター発表にて専門医優秀症例発表賞を受賞致しました。

第150回という区切りの前回大会より、専門医・認定医優秀症例発表賞が設けられました。これは、患者国民が期待する質の高い治療法や機器等の活用法についての情報共有を図ることを目的とした、修復、歯内、歯周の保存領域に関連した症例報告を表彰する制度になります。

歯内療法分野において、歯根吸収は、日常臨床で遭遇する頻度はそこまで多くはないものの、その対応に苦慮することが多い症例です。臨床的には、外傷の既往のある歯などに無症状で進行するため、隣在歯等のX線検査で偶然発見されることが多く、歯根吸収の進行状況によっては、抜歯となることも少なくありません。診断には、歯科用コーンビーム CT (CBCT) が有用であり、治療方針の決定に大きく寄与します。さらに、マイクロスコープの使用により、これまで困難であった処置も可能となり、保存できる可能性が広がったと考えています。

今後も、これを励みに、エビデンスに則った治

療を根本におき、日常臨床に還元していきたいと考えております。本発表に際し、ご指導賜りました、野村教授、竹中助教にこの場をお借りして心より感謝申し上げます。



# Excellent Poster Presentation Award at the 1<sup>st</sup> General Meeting of the Asian-Oceanian Federation of Conservative Dentistry-ConsAsia 2019

Traithawit Naksagoon (2<sup>nd</sup> year graduate student)  
Division of Cariology, Operative Dentistry, and Endodontics  
Niigata University Graduate School of Medical and Dental Sciences



Greeting to all members of Dental School, Niigata University, my name is Naksagoon Traithawit (ナークサクン トライタウイット). I am from Thailand and I have studied at this graduate school since October 2018. Now, I would like to deliver a pleasant news to all of you. At the 1<sup>st</sup> General Meeting of the Asian-Oceanian Federation of Conservative Dentistry - ConsAsia 2019 (in accordance with a KACD-JSCD 21<sup>st</sup> Joint Scientific Meeting) which held on 8 - 10 November 2019 in Seoul, South Korea, I have received "Excellent Poster Presentation Award" with the research title "Anti-cariogenic Biofilm Effect of Zinc Glass-containing Glass Ionomer Cement After Long-term Water Immersion Using In Vitro MRD Flow Cell

Study" My research is to assess the effects of water aging to a novel GIC containing fluoro-zinc-silicate filler on anti-cariogenic biofilm properties. It was an honorable moment of my life since I have started my career and I would like thank Dean of Faculty of Dentistry (Prof. Maeda) and Prof. Noiri for accepting me to study in this school and supporting this research, my advisers (Ohsumi sensei and Takenaka sensei) who always take care, give good advices and kindly helps throughout this research and also all the members of Cariology Division. Please continue support me along the way in the future. Thank you very much.

## 歯科技工部門だより

歯科技工部門 山野井 敬彦

4月1日付で歯科技工部門歯科技工士長を拝命致しました山野井敬彦です。

40年間在籍しておりました木村歯科技工士長の後任として、至らぬところは多々ございますがご指導のほどよろしく申し上げます。

さて現在歯科技工士を取り巻く環境はますます厳しくなっております。

数年前に歯科技工士国家試験受験者が1000人を割ったという事が話題になりましたが、昨年すでに800人を割っております。(私が卒業した当時は全国で毎年約3000人が卒業しておりました)単純に都道府県数で割ると1県あたり10数名の新人しか充当出来ない事態になっています。また、そのうちの半数以上が5年以内で離職してしまうという調査結果もあります。現在就業している歯科技工士数は約30000人ですがその内約半数が私と同年代の50代以上です。

2018年より8回におよぶ厚生労働省が開催した「歯科技工士の養成・確保に関する検討会」でも議論がおこなわれておりますが解決策は見出せておりません。5校あった国立の歯科技工士専門学校も新潟大学が閉校となり医科歯科大学と広島大学が4大に移行した後、残っていた東北大学も来年度募集停止となりました。国立の専門学校としては大阪大学のみとなりました。

そのような中、幸いにして当部門は小林副院長及び小野教授、木村元歯科技工士長の御尽力により、新人2名を確保し従前の6名体制を維持する事が出来ました。2名の女性が加わり雰囲気が変わりましたねと言われることも多いです。

歯科技工部門は病院の診療支援部に属しており

ますが検査、放射線、リハビリ、臨床工学、歯科衛生の各部門の中で人数が1番少ない部門です。そしてその業務内容についても認知度が1番低いのではないのでしょうか。先ずは病院内から当部門の取り組み等を認知して頂く事から始めていこうと思っております。

前回歯学部ニュースにレーザー溶接機について書かせていただきましたが、今回は当部門において最近行われている技工についてお話しさせていただきます。

先ずは高周波鋳造機の導入により金属床義歯を内製出来る事になった事が非常に大きな変化です。この事により製作できる補綴物の幅が広がりました。学生実習の校費負担金属床義歯の製作も行っております。また、顎義歯、舌接触補助床、スピーチエイド、ホッツ床、放射線照射時の保護シーネなどの装置を製作する事が多くなりました。



また、今年度から医科からの依頼を受けて気管挿管時に用いる保護シーネの製作も始めました。新たに導入された3Dプリンターを用いて術前シミュレーション用実物大臓器モデルの製作も開始致しました。他大学においては数年前から石膏系の高額な3Dプリンターが導入されておりましたが安価で高性能なForm 2により光造形樹脂製の骨モデルが製作可能になりました。現在は口腔外科からの依頼で主に頭蓋骨を造形しております。3次元画像可視化システムソフトウェアも購入いたしましたので当部門でDICOMデータから必要部位を抽出し、STLデータに変換し造形を行います。依頼があれば他の臓器につきましても造形を行う予定です。ご興味のある方はどうぞいらして下さい。

今後スキャナーとソフトウェアが導入されるとステント、トレー、金属床フレーム等を造形することが可能となります。顎補綴・顔面補綴への応用や他にも様々な用途で活用が見込まれますので今後は楽しみな装置です。

外来においても口腔内スキャナーの導入やデジタル化が今後一気に進むと思われますが当部門におきましてもCAD/CAM装置の導入が喫緊の課題です。早急に導入できるようあらゆる方法を探り実現に向け努力いたします。先にも申しましたが当部門は6名で業務を行っておりますので昨今の働き方改革の実現のためにもどうしても必要な

装置となります。そして職人としての側面もある歯科技工士ですので技術をさらに高めていくことももちろん大切ですが、大学病院の歯科技工士として医科との連携ができるような医療人としての歯科技工士を目指し、(最近の言葉で言いますと)歯科全体でONE TEAMで業務を行っていきたいと思います。

今後とも歯科技工部門をどうぞよろしくお願いいたします。





# 新潟歯学会報告

## 令和元年度 新潟歯学会例会報告

令和元年度新潟歯学会集会幹事 顎顔面口腔外科学分野  
永田昌毅

令和元年度新潟歯学会第1回例会は7月13日(土)に歯学部講堂で開催致しました。16題の一般口演と、教授就任講演として、新潟大学歯学部口腔生命福祉学講座口腔保健学分野 吉羽邦彦先生に「歯髄保存療法と歯髄創傷治癒・修復機構」と題するご講演をいただきました。学内外から97名の参加者数を数えました。

令和元年11月9日(土)には令和元年度新潟歯学会第2回例会を同じく歯学部講堂で開催致しま

した。学内外から93名の会員の皆様にご参加をいただき、一般口演16題の研究発表がなされ、続いて活発な討論が行われました。

総会、第1回例会、第2回例会において、お忙しい中、座長をお引き受けいただいた先生方、最新の知見を発表いただいた演者の方々、さらに参加いただいた会員の皆様すべてのご協力により、令和元年度の新潟歯学会集会を滞りなく終了できましたことを、この場をお借りして御礼申し上げます。

令和2年度は摂食嚥下リハビリテーション学分野に集会係に担当を引き継がせていただきます。第53回新潟歯学会総会は4月11日(土)に開催予定です。新潟歯学会に関する詳しい情報につきましては新潟歯学会ホームページをご覧ください。



写真1 第一回例会 会場



写真2 第一回例会 教授就任講演 吉羽邦彦先生



写真3 第二回例会 会場



# 同窓会だより

## 同窓会だより

会 長 有 松 美 紀 子  
副 会 長 野 内 昭 宏  
専 務 理 事 内 藤 義 隆

新潟大学は新制大学になって今年で70周年を迎えます。日本海側最大の総合大学であり、10学部あります。新設学部で卒業生がまだいない創生学部をのぞいて、それぞれの学部には同窓会があります。

私たち歯学部同窓会も、2021年には創立50年を迎えます。しかし、医学部学士会の創立110年には遠く及びません。会員数も、新潟大学全体の同窓生数のうちのわずか6%程度しかいません。

けれども、歴史が浅く、小さい同窓会であっても、実行力と強い結束があります。そして、当会の正会員は間違いなく新潟大学の卒業生でもあります。卒業年次も卒業学部も異なる人々も、国内にいる人も海外にいる人も、「新潟大学」というキーワードひとつで繋がることができます。

今年度は、そんなことを感じさせる2つのエピソードがありましたので、それをご紹介します。

### 【エピソード① 新潟大学全学同窓会交流会】

新潟大学を卒業した方々全員を対象として、平成17年に新潟大学全学同窓会が設立されました。それ以降、毎年、一学部（の同窓会）が担当になり交流会を企画運営してきました。単純計算では9年に一度当番が回ってくることになります。

今年度は歯学部が担当でした。歯科の重要性を歯学部以外の方々に理解をして頂くこと

と、日本酒の魅力を確認し親交を深めることを目的として、「お口から考える全身の健康」というテーマで、全身の健康に関わる歯周病と、新潟県の誇る日本酒について、当同窓会会員で新潟大学名誉教授の吉江弘正先生（歯周病科前教授）と、新潟県醸造試験場場長・金桶光起氏にご講演頂きました。

多くの方々の興味と関心のあるテーマであり、お二人の軽妙でかつ内容の深いお話は大好評でした。

懇親会では、2019 ミス日本酒 新潟の鈴木聖袈さん（大学院修士課程2年、農学部）を司会に迎



講演される金桶場長と吉江先生





え、日本酒を囲んで世代や学部を越えた交流ができました。ここでのご縁が更に広がりを見せると

思われました。参加人数も昨年度より多く、参加者の満足度も大きかったようです。



懇親会も満席



会場を埋め尽くす聴講者

【エピソード② 新潟大学首都圏同窓会】

新潟大学卒業生で首都圏在住の方々を対象として、11月17日（日）、アルカディア市ヶ谷において、第48回新潟大学首都圏同窓会が開催されました。今回は歯学部同窓会が当番で、首都圏の各支部が合同で企画・運営を担当しました。首都圏と言っても広いので準備が大変だったと思います。

講演会は、横浜市立大学附属市民総合医療センター歯科口腔外科前教授・大村進先生（歯学科9期生）が「もしも舌癌になったら」という演題で楽しく、わかりやすくお話しされました。芸能人の口腔がんの話題があり、日々の診療でも患者様から聞かれることが多くなりましたが、参加者は熱心に聴講されていました。

会場には世代や学部を越えた100名ほどの同窓生が参加されていましたが、どの学部の方も若い方の参加が少ないことが課題であると異口同音に言われていました。しかし、会場では若い方を数名お見かけしました。学部に関係なく、新潟大学



懇親会出席の歯学部同窓会関係者



\*\*\*\*\*

を卒業したということが大きな心の支えになっているようでした。

新潟大学の同窓生が一堂に集うという貴重な集まりを企画運営された歯学部首都圏同窓会の皆さま、大変お疲れ様でした。



懇親会の様子①



高橋学長を囲んで



懇親会の様子②



第48回新潟大学首都圏同窓会集合写真

\*\*\*\*\*



## 同窓会学術セミナーを受講して

歯学科43期生 藤森章浩

早いもので、今年で卒業7年目となります。その間、がむしゃらに外来診療を行ってききましたが、2年ほど前から週に一度、訪問診療に従事する経験もしてきました。

義歯を中心とした訪問診療をルーティンで行う日々でしたが、誤嚥性肺炎のリスクや、2025年問題などを知るにつけ、これからの日本の医療に、摂食支援という形で歯科医師が果たす役割の大切さを痛感しました。

勤務する法人を通じて、他のDrにVE検査を依頼し、嚥下訓練などを行いましたが、自分でも検査の施行や診断など、もう一段のレベルアップをと考えていた時に、同窓会誌にて今回のセミナーを知り、即申し込みをさせていただきました。

数年ぶりの新潟に懐かしさと、外来棟の移転により、自分たちが学んでいた頃とは大きく変わってしまった校舎に寂しさと緊張を感じつつ受付を

済ませました。しかしその後、伊藤先生や庭野先生、講義では井上教授や辻村先生のお顔を拝見し、普段受講する外部のセミナーでは決して感じるこのない、安心感が生まれ、自然と緊張がほぐれていきました。今回、同窓会セミナーは初めての受講でしたが、こういった安心感の中で勉強できることを大変嬉しく思いました。

午前中の井上教授の講義に続いて今回のメイン、VE検査のハンズオンが始まりました。研修医の頃に少し行ったものの、当時の私はその意味と重要性をまったく理解できておらず、その経験



\*\*\*\*\*

は忘却の彼方です。大変申し訳ございません。そのような訳で、ほぼ未経験の状態でご挑まさせていただきました。まずは患者役となり実際にVE検査を受ける事に。私は特に反射も強い方ではなく、検査して下さる先生も、私とは違い何度かご経験のあるベテランの方ということで、特段大きな心配はしていませんでした。が、これがなかなかつらいのです。検査自体はとてもスムーズに進んでいったのですが、それでも検査中咳き込み、つらいなあと思う事が何度かありました。この患者経験は非常にありがたく、今までなんとなく見ていた検査が、意外にも患者さんにとって負担になりうると身を持って体験することができました。

術者交代となり、いよいよ私が検査をする番に。カメラの持ち方、立ち方、患者の位置から素人丸出しで、指導医の先生に教えて頂きます。必死にカメラを進め、画面を覗みつけます。検査項目がいくつかあるのですが、正直、「次は何の検査だったか」などと思う余裕はありません。指導医の先生に言われるがまま、項目をこなしてい

ました。なんとか無事検査を終え、先生からは初めてにしては上出来と言って頂けましたが、明日から「私VE検査できます」などとはとても言えない、というのが素直な感想でした。

VE検査を実際に行う事については、より鍛錬が必要ですが、検査へのステップや、摂食、嚥下への考え方、検査の意味と評価など多くのことを習得できた、非常に有意義な1日でした。東京に戻り、すぐの訪問診療で拝見した、新患の方の摂食支援までの治療計画を、迷いなく立てる事が出来たのは、一重にこのセミナーのおかげです。ここを出発点として、さらに精進していければと思います。

最後に、丁寧な指導をして下さった、井上教授をはじめ、摂リ八科の先生方、貴重な機会を作ってく下さった同窓会の先生方、共に参加され、相互実習をおこなった先生方、そして新潟に前入りした私と、夜遅くまで飲みにつきあってくれた新潟の同級生に心からの感謝を申し上げます。ありがとうございました。



\*\*\*\*\*



# 令和元年度新潟大学歯学部同窓会 学術セミナーⅢを拝聴して

歯学科28期生 大島 賢

令和元年11月24日（日）に開催された「新潟大学歯学部同窓会学術セミナーⅢ」を拝聴しました。

今回は「認知症高齢者の理解とケア～口腔ケアや食支援の視点から～」と題して、長岡赤十字病院 教育研修推進室・教育担当師長の宮本良子先生からの御講演でした（聴講者29名）。

超高齢社会（高齢者（65歳以上）の比率が21%以上）に突入した日本において、認知症高齢者数も自ずと増加の一途をたどっています。私の日常臨床においても、訪問診療に限らず、診療室でも認知症高齢者の診療を行わない日はないといっても過言ではありません。

講演では、認知症の診断とその臨床症状・経過についての説明から始まり、認知症患者に使われる薬物とその臨床効果、また、認知症に対しての国家の取り組み（認知症施策推進大綱及び総合戦略（新オレンジプラン））についても詳細な解説がありました。

歯科診療において注意すべき気づきのポイントとして、口腔内の状態の変化以外にも

- ・ 同じことを何回も質問する・職員に対する態度がきつくなるなど変化した・整容・身だしなみが変化した・診療室の出入口を間違える（以上抜粋）

など、ちょっとした変化を見逃さないことが重要

であるとのことでした。

また「認知症の人の体験を通して」という話題についてもお話しいただきましたが、「不安」「自信の喪失」「混乱」「孤立」といった感情を抱いている方が多いことにも気づかされました。

以上を通して、我々医療従事者（に限らず、家族・周囲の方々にも当てはまりますが）は、認知症の方の気持ちを理解し、寄り添うことが大切であると感じました。

宮本先生からは、認知機能障害がある方へのコミュニケーション方法を具体的に御教示いただきました（まわりの雑音を減らす・視野にゆっくり入ってから話す・短くゆっくりはっきり話す・大事なことは繰り返す等）。早速実践しています。

誰にとっても「いつか来る（かもしれない）道」です。こちらがちょっとだけ気持ちにゆとりをもって向かい合うことで、認知症の方の心に寄り添えると良いなと思いました。

講師の宮本先生、歯学部同窓会学術委員の皆様、ありがとうございました。今後の学術セミナーも、楽しみにしております。



## 歯学部を支える方々

## 歯学部で教わった自分の役割

歯学部事務室総務係 林 尚 人

歯学部総務係の林と申します。平成29年10月に異動して参りました。

大学職員としては、医歯学総合病院に配属されて7年間勤務し、その後、医学科の会計係で3年半勤務しておりました。歯学部では3年目を迎え、採用後ずっとこの旭町キャンパスの先生方にお世話になっております。

現在の業務は、予算や教員人件費ポイントの執行計画の立案、旧歯科診療棟の再整備、国際シンポジウムの準備が主な内容で、学部長をはじめ多くの先生方からご指導頂き、毎日頭がフル回転しています…。

私にとって歯学部は、事務職員として大きな転機となった部署でした。それまでは、「とにかく自分の業務をいかに効率的にこなすか」という点に目を向けていました。これも事務職員として勿論大切なことです。しかし、前田学部長をはじめ、先生方が新潟にとどまらず、世界へと目を向け、歯学教育のフロントランナーとして国内外で活躍されている姿を目にして、自分にできることで歯学部および旭町キャンパス、さらに新潟大学を良くしたいと思うようになりました。

そんな先生方と日々お仕事をする中で、「細かな調整」というものが自分にできることであり、やらなければいけない役割であることに気づきました。電話でのやり取りしかなかった部署にも出

向くように心がけて、徐々にですが様々な部署の職員に話を聞いてもらえるようになりました。先生方にとっては、まだまだ改善を実感頂けない部分もあるかと思いますが、歯学部の意見をもとに、新潟大学全体の改善につながった部分もあります。これも先生方からの多大なご協力があったので、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

さて、原稿の執筆依頼を頂いた年末は、海外からの留学生に向けた「歯学部プロモーションビデオ」(<https://www.dent.niigata-u.ac.jp/>にて公開中)の撮影の最中にあります。これもまた多くの先生や学生の皆さんにご協力頂いたおかげで、制作を進めることができました。この場をお借りして改めて感謝申し上げます。2月に開催される国際シンポジウムでお披露目されますので、ご期待ください！





## 2年目の今

歯学部学務係 佐藤 純奈

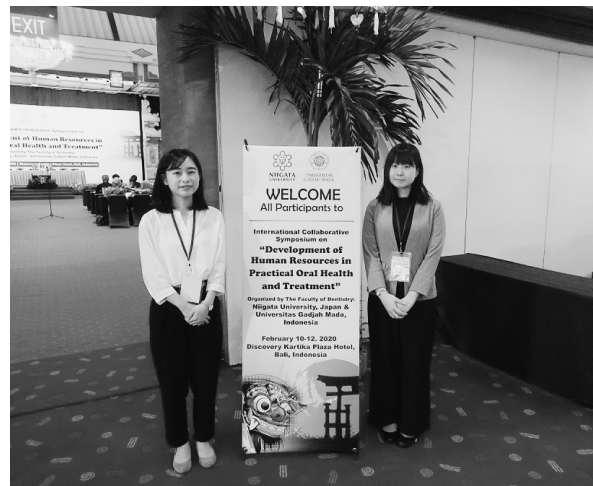
歯学部学務係の佐藤と申します。新潟大学人文学部を卒業後、平成30年4月に事務職員として歯学部学務係に配属となりました。

現在採用2年目となりましたが、事務室の上司、先輩方にご迷惑をおかけしながら、また、歯学部の先生方に多大なご協力を賜りながら、社会人として日々成長させていただいております。

日々の業務では、大学院入試や学位論文審査、留学生の受入れ業務等、主に大学院関係と留学生関係を担当しております。また、海外出張の機会もあり、国際シンポジウムの補助や海外の大学との協定締結に立ち会わせていただくなど、歯学部ならではの経験もさせていただきました。今後は歯学部でも留学生の増加が見込まれ、国際化が進んでいる中で、様々な国の大学教員や学生との交流は貴重な経験となりました。

さて、実は、私は今年度卒業の歯学科6年生と同年代なのですが、友人達と大学生活を謳歌して

いる姿を見かけると、自分の学生生活を思い出し、懐かしく、少しうらやましくも思います。そんなかけがえのない大学生活がより良いものになるよう、学務係員として陰ながらお力添えをしていきたいと思っております。今後ともどうぞよろしくをお願いいたします。



# 教 職 員 異 動

## 学 部

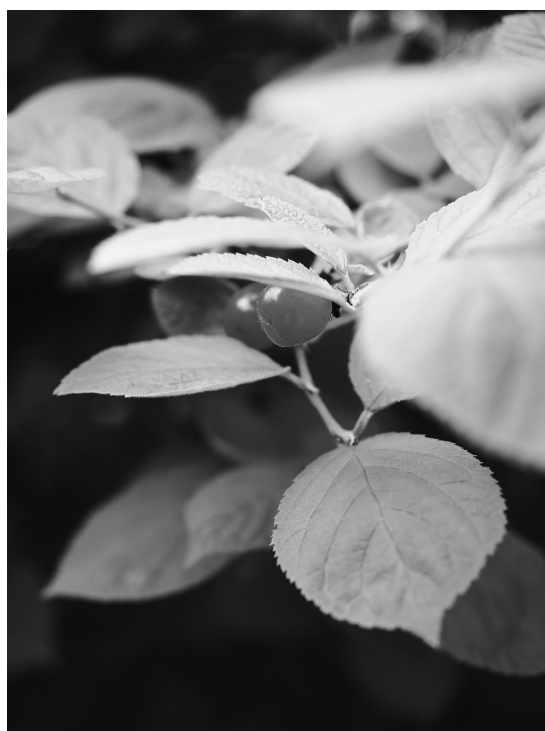
### 【教員等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
退職	1. 8. 31	黒 瀬 雅 之		口腔生理学分野助教
採用	1. 11. 1	後 藤 理 恵	摂食嚥下リハビリテーション学分野 特任助手	
退職	1. 11. 30	中 島 俊 一		口腔生命福祉学科助教
退職	1. 11. 30	SALAZAR SIMONNE		包括歯科補綴学分野特任助教
採用	2. 1. 1	原 実 生	高度口腔機能教育研究センター助教	高度口腔機能教育研究センター 特任助教
定年退職	2. 3. 31	大 川 成 剛		生体組織再生工学分野准教授
定年退職	2. 3. 31	中 川 兼 人		口腔生命福祉学科准教授
退職	2. 3. 31	永 田 昌 毅	医歯学総合病院特任教授	顎顔面口腔外科学准教授
退職	2. 3. 31	黒 澤 美 絵		小児歯科学分野助教
退職	2. 3. 31	小 山 貴 寛		顎顔面口腔外科学助教
任期満了	2. 3. 31	笹 杏 奈		摂食嚥下リハビリテーション学分野 特任助手



## 【事務等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動後の所属・職	異動前の所属・職
任期満了	1. 9. 30	阿 部 遼		歯科矯正学分野教務補佐員
任期満了	1. 9. 30	河 村 智 子		歯科矯正学分野教務補佐員
採用	1. 10. 1	常 木 雅 之	硬組織形態学分野 研究支援者（科研費技術者）	
配置換	1. 10. 1	山 下 啓 太	財務部財務企画課	歯学部事務室総務係
採用	1. 10. 1	五十嵐 未 来	歯学部事務室総務係	
採用	1. 12. 23	阿 部 優 子	硬組織形態学分野技術補佐員	
採用	2. 2. 19	飯 田 麻美子	歯学部事務室総務係（育休代替職員）	
任期満了	2. 3. 10	布 川 友 美		歯学部事務室総務係派遣職員
育児休業復帰	2. 3. 11	中 村 麻 実	歯学部事務室総務係	
定年退職	2. 3. 31	監 物 新 一	高度口腔機能教育研究センター 技術職員（再雇用）	硬組織形態学分野技術専門員



## 病 院

### 【教員等】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
育児休業復帰	1. 8. 10	皆 川 久美子	予防歯科医員	予防歯科医員
退職	1. 9. 30	金 丸 博 子		歯科麻酔科医員
退職	1. 9. 30	小 貫 和佳奈		口腔リハビリテーション科レジデント (パート)
採用	1. 10. 1	小 貫 和佳奈	摂食嚥下機能回復部レジデント	口腔リハビリテーション科レジデント (パート)
採用	1. 10. 1	金 丸 博 子	歯科麻酔科助教	歯科麻酔科医員
採用	1. 10. 1	鈴 木 絢 子	小児歯科・障がい者歯科医員	
退職	1. 10. 31	竹 内 麻 衣		歯周病科医員 (パート)
昇任	1. 11. 1	濃 野 要	予防歯科講師	予防歯科助教
育児休業	1. 11. 27	小 玉 由 記		歯科麻酔科医員
退職	1. 11. 30	山 鹿 義 郎		義歯診療科助教
退職	1. 12. 31	佐 藤 美寿々		予防歯科助教
採用	2. 1. 1	西 真紀子	予防歯科助教	
育児休業	2. 1. 20	日 吉 梨 乃		歯科総合診療部レジデント
退職	2. 1. 31	久保田 健彦		歯周病科講師
昇任	2. 2. 1	高 橋 直 紀	歯周病科講師	歯周病科助教
退職	2. 2. 5	清 水 志 保		顎顔面口腔外科医員 (パート)
育児休業	2. 2. 18	大 塚 有紀子		歯科麻酔科医員
育児休業復帰	2. 3. 1	小 玉 由 記	歯科麻酔科医員	歯科麻酔科医員
退職	2. 3. 31	小 玉 直 樹		患者総合サポートセンター特任助教
任期満了	2. 3. 31	小 川 信		輸血・再生・細胞治療センター特任助教 (短時間)
任期満了	2. 3. 31	佐 藤 由美子	患者総合サポートセンター特任助教	歯科麻酔科特任助教
任期満了	2. 3. 31	浅 見 栄 里		口腔再建外科レジデント (パート)
任期満了	2. 3. 31	荻 野 奈保子		口腔再建外科医員 (パート)
任期満了	2. 3. 31	河原田 壮史		口腔再建外科医員 (パート)
任期満了	2. 3. 31	竹 内 涼 子		口腔再建外科医員 (パート)
任期満了	2. 3. 31	中 村 彬 彦		口腔再建外科レジデント (パート)
任期満了	2. 3. 31	西 田 洋 平	歯科麻酔科医員	歯科麻酔科医員 (パート)
任期満了	2. 3. 31	笹 川 祐 輝		小児歯科・障がい者歯科レジデント (パート)
任期満了	2. 3. 31	中 田 樹 里	矯正歯科医員	矯正歯科医員 (パート)

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
任期満了	2. 3. 31	磯野 俊仁		歯の診療科レジデント (パート)
任期満了	2. 3. 31	白柏 麻里		歯の診療科レジデント (パート)
任期満了	2. 3. 31	鈴木 裕希		歯の診療科医員 (パート)
任期満了	2. 3. 31	高岡 由梨那	冠・ブリッジ診療科医員	冠・ブリッジ診療科医員 (パート)
任期満了	2. 3. 31	上原文子		義歯診療科医員 (パート)
任期満了	2. 3. 31	兒玉 匠平	義歯診療科医員	義歯診療科医員 (パート)
任期満了	2. 3. 31	吉原 翠	摂食嚥下機能回復部医員	口腔リハビリテーション科医員 (パート)
任期満了	2. 3. 31	金丸 祥平		口腔再建外科医員
任期満了	2. 3. 31	齋藤 大輔		口腔再建外科医員
任期満了	2. 3. 31	須田 大亮	口腔再建外科専任助教	口腔再建外科医員
任期満了	2. 3. 31	齋藤 夕子	顎顔面口腔外科専任助教	顎顔面口腔外科医員
任期満了	2. 3. 31	山田 葵	高度医療開発センター特任助教	顎顔面口腔外科レジデント
任期満了	2. 3. 31	小玉 由記		歯科麻酔科医員
任期満了	2. 3. 31	平原 三貴子		小児歯科・障がい者歯科医員
任期満了	2. 3. 31	北見 公平		矯正歯科医員
任期満了	2. 3. 31	保 苺 崇大	歯周病科医員 (パート)	歯周病科医員
任期満了	2. 3. 31	遠 間 愛子	歯の診療科助教 (臨時的採用職員)	歯の診療科医員
任期満了	2. 3. 31	井田 貴子		冠・ブリッジ診療科医員
任期満了	2. 3. 31	小野 喜樹	冠・ブリッジ診療科レジデント (パート)	冠・ブリッジ診療科レジデント
任期満了	2. 3. 31	高 昇 将	予防歯科助教	冠・ブリッジ診療科医員
任期満了	2. 3. 31	山本 悠	冠・ブリッジ診療科レジデント (パート)	冠・ブリッジ診療科レジデント
任期満了	2. 3. 31	小貫 和佳奈	摂食嚥下機能回復部レジデント (パート)	摂食嚥下機能回復部レジデント
任期満了	2. 3. 31	浅野 佐和子		歯科総合診療部レジデント
任期満了	2. 3. 31	日吉 梨乃		歯科総合診療部レジデント
任期満了	2. 3. 31	河村 篤志	顎口腔インプラント治療部医員 (パート)	顎関節治療部医員
任期満了	2. 3. 31	土屋 健太郎		顎関節治療部レジデント
任期満了	2. 3. 31	今井 秀明		インプラント治療部医員
任期満了	2. 3. 31	上松 晃也		インプラント治療部医員

## 【看護・診療支援部】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
任期満了	1. 8. 31	森 岡 沙耶香	歯科衛生部門歯科衛生士	
退職	1. 8. 31	品 田 瑞 季		東3階病棟看護師
所属換	1. 9. 1	原 田 映 輝	東3階病棟看護師	東7階病棟看護師
退職	1. 9. 30	田 巻 好		東3階病棟看護師
所属換	1. 10. 1	宮 本 文 美	東3階病棟看護師	手術部看護師
所属換	1. 10. 1	漆 間 希 恵	外来（歯科）看護師	西8階病棟看護師
育児休業	1. 11. 27	井 上 愛 恵		東3階病棟看護師
退職	1. 11. 30	袖 山 美 花		東3階病棟看護師
退職	2. 1. 31	黒 木 尚 子		東3階病棟看護師
退職	2. 3. 31	中 井 恵 美	患者総合サポートセンター歯科衛生士	
任期満了	2. 3. 31	田 巻 麻帆子	歯科衛生部門歯科衛生士	
定年退職	2. 3. 31	坂 本 富美子		外来（歯科）看護師
育児休業復帰	2. 4. 1	筒 井 亜香里	歯科衛生部門歯科衛生士	

## 【事務部】

異動区分	発令年月日	氏名	異動内容	異動前の職名
配置換	1. 10. 1	田 澤 由紀子	総務課専門職員	医事課審査係長
配置換	1. 10. 1	伊 藤 和 美	総務課職員係長	総務課専門職員
配置換	1. 10. 1	小 出 忠 弘	総務課専門職員	総務課職員係長
配置換	1. 10. 1	平 澤 秀 幸	経営企画課医療情報係長	経営企画課主任
配置換	1. 10. 1	村 山 登	管理運営課専門職員	財務部財務管理課収入係長
配置換	1. 10. 1	宇 田 稔 樹	学術情報部情報企画課情報企画係長	経営企画課医療情報係長

## 編集後記

この度初めて歯学部ニュースの編集委員を担当させていただきました。大変お忙しい中、原稿執筆にご協力いただきました先生方、学生さんに感謝申し上げます。歯学部ニュースには何度か寄稿させていただきましたが、多くの先生方、学生さんの力でこの1冊が完成していることを編集の立場から改めて実感することができました。微力ながらも歯学部ニュースの編集に携わらせていただき、私個人としてもとても良い経験を積ませていただくことができました。誠にありがとうございました。

小児歯科学分野 中島 努

今回、初めて歯学部ニュースの編集委員を担当させていただきました矯正歯科の高橋です。編集に携わることで率直に感じたのは、歯学部ニュースの記事を読む事で後輩の方々のカリキュラム選択において大変参考になったのではないかとことです。実際に参加したプログラムの活動報告等はまさに生きた情報として読者の方に届くのではないかと考えております。最後に、様々な種類の原稿依頼をお願いしましたが、学生さん、研修医の先生達は皆一様に快く引き受けていただきました。この場をお借りして感謝申し上げます。

歯科矯正学分野 高橋 功次朗

まず初めに、この度はお忙しい中、原稿執筆にご協力いただきました先生方、学生さんにこの場をお借りして感謝申し上げます。今回初めて歯学部ニュースの編集に携わらせていただき、冊子ができるまでに多くの方の御尽力があることを改めて実感しました。編集業務を通じて、学生さんの部活動に対する熱い思いや充実した学生生活の様子をうかがい知ることができ、私自身、学生であった当時の事を思い出し、非常に感慨深い気持ちになりました。読者の皆様にも、活気溢れる歯学部の様子をぜひ感じていただければと思います。

生体歯科補綴学分野 江口 香里

このたび初めて歯学部ニュースの編集委員を仰せつかり及ばずながら参加させていただきました。暮れの忙しい時期に快く原稿を引き受けていただいた学生さんや先生方には心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

顎顔面口腔外科 小玉 直樹

歯学部ニュース令和元年度第2号(136号)の編集および取りまとめを担当させていただきました。編集を通じて、実に多くの方々の尽力によって歯学部ニュースが作られているということを実感しました。ご執筆いただきました原稿をいち早く拝読させていただく中で、歯学部ニュースは文字通り、新潟大学歯学部の今を伝える大切な情報発信源となっていると強く感じました。ご多忙にも関わらず、原稿をご執筆下さりました先生方、学生の皆様、そして編集に際し、多大なご尽力をいただきました諸先生方、事務の方、編集委員の諸先生方、(株)ウィザップの本間様には、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

病理部(歯科担当)・歯科病理検査室 丸山 智

## 表紙・裏表紙写真の説明

### 表紙の撮影データ

撮影地：美人林（十日町市）

撮影日：2019年11月

使用機材：OLYMPUS E-M 5 Mark II / M.ZUIKO DIGITAL ED 12-100mm F4.0 IS PRO / 絞り：F4.5・シャッター速度：100分の1秒（露出補正+1）

### 裏表紙の撮影データ

撮影地：県立鳥屋野潟公園（新潟市）

撮影日：2020年3月

使用機材：OLYMPUS E-P 5 / M.ZUIKO DIGITAL ED 12-40mm F2.8 PRO / 絞り：F2.8・シャッター速度：1250分の1秒（露出補正+2）

コメント：今回も地元新潟の観光スポットから、十日町市内の美人林と新潟市内の鳥屋野潟公園の木々を被写体としてみました。地球温暖化に伴う暖冬のせいでしょうか、秋が遅くなり紅葉の色づきもあまり芳しくない状況で、記録的少雪となった短い冬を過ごしたのち、春も早く訪れ3月上旬には梅が見ごろとなっていました。新潟らしからぬ秋と春の雰囲気が出るように、表紙・裏表紙いずれも露出を多めにかけて明るめに仕上げてみました。

### 本誌中の写真の使用機材

ボディ：OLYMPUS E-M 5 Mark II, PEN-F, E-P 5

レンズ：M.ZUIKO DIGITAL ED 12-100mm F4.0 IS PRO, M.ZUIKO DIGITAL ED 12-40mm F2.8 PRO, M.ZUIKO DIGITAL ED 12mm F2.0

撮影者：林 孝文

## 歯学部ニュース

令和元年度第2号（通算136号）

発行日 令和2年4月7日

発行者 新潟大学歯学部広報委員会

編集責任者 丸山 智、魚島 勝美

編集委員 中島 努、高橋功次朗  
江口 香里、小玉 直樹

印刷所 (株)ウイザップ





リサイクル適性 

この印刷物は、印刷用の紙へ  
リサイクルできます。